でも、悉く、佛教の極意を丸出しにしたものである。禪宗は、常に、この極意丸出しである。それが爲めに、佛教の極意丸出しの宗旨が、茲に復た一つ開けたやうな風になつたのが、即ち、禪宗である。

併し乍ら、前にも述べた通り、禪は各宗共に此れを備へざるは無いので、各宗、悉く、其の堂奥に入つたならば、皆な、此の禪に歸してしまふのであるから、各宗と肩を並べて、別に何ぞ目的でもあるものゝやうに思ふ者もあるやうであるが、決して、そんな譯のものでは無い。

三、淨土眞宗の機法一體

淨土眞宗に於て、

一念發起、入正定聚、即得往生、不退轉、

といふのが、即ち、親鸞上人や蓮如上人が千辛萬苦して弘められたところの目的である。

ある。其の彌陀の本願を一向專念に賴む心の起つた時、その賴む人の心と、賴まれる佛の心と一致冥合して、一つとも云はれなければ、別であるとも云はれない一種の感應が生ずる。それが釋尊と迦葉との拈華微笑と同じ妙味で、これを淨土眞宗では、

「機法一體」

といふ。即ち、賴む衆生と、賴まれる本願とが一體になつたと云ふのであるが、其の機法一體になつたところを、釋尊は、

「正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微妙の法門」

と名づけて、摩訶迦葉に附屬せられたのである。だから、淨土眞宗の宗意も、要するに、教外別傳の極意に外ならないのである。

他力の極點であるといはれて居る淨土眞宗でさへも、已に其通りであるから、其他の自力を主張し、「即身即佛」を目的とする天台宗、眞言宗、日蓮宗といふやうな

宗旨で敎へるところは、結局、我が禪宗の立處に到らねばならぬのである。故に、道元禪師も、

「禪は佛法の總府である」

と云はれて居る。禪宗などゝ名づく可きものも、元來は有る可きものではないのぢや。

絕對的善行

一、卑むべき相對的善行

世間でいふ德行は、善行、即ち、善き行ひである。近來は、

「一日一善」

など稱へて、善行を奬めつゝあるが、まことに喜ばしき次第である。總體、敎育なるものは、學と德とを併せ修めしむることを目的とするものであるが、兎もすると德行を修めしむることを遺忘する傾きがあるのは、大いに注意すべきことであると思ふ。

凡そ、善行は、これを二つに分けて見ることが出來る。即ち、

「積善」

と、

「陰德」

とである。而して、宗教的善行は隱德に屬するものであつて、報酬を求むる心のない善行が隱德である。

然るに、人の情として、小善も廣く傳へられんことを希ひ、大惡も人に知られざらんことを望むの弱點がある。これは甚だ宜しくない。左手に善事を行うて右手に知らしむる勿れといふ箴言もあるらくゐで、隱れたる善行は、絶對的の善行である。右手に與へて左手に受けんとする相對的善行は卑しむべきものである。

二、達磨大師と梁の武帝

梁の武帝と云へば、學問に造詣深く、悟道亦た尋常ならざるものあり、佛心天子と呼ばれて、數百卷の著書を遺せしほどの人であるが、或時達摩大師に向ひ、

「朕は建寺度僧、其他あらゆる善根を施したが、之に對して、如何なる功德があるであらうか」

と尋ねられた。大師は、聞いて、言下に、

「無功德」

と答へた。之れは大なる善行には報酬は無いものであることを意味するのである。大師の喝破したるところは、遺に其の眞を誤らない。

無功德は取りも直さず大功德である。物に比較した大と云ふのでは多寡が知れて居る。絶體無限の大は虛無に齊しいもので、無限大の功德は無功德と同じ。たとへば、太陽は萬物を化育する。併し太陽は何等の報酬を求むる心が無い。縱し太陽に心なくとも、物象は爾かく語つて居る。其の無限大なる善事に對しても、計量し得られるものが無い。即ち、無功德である。功德を求めざる善行は、實に清々しいものである。

三、犧牲の對象は無報酬

書を讀んで子孫に遺す、子孫之れを讀まず、金を積んで子孫に遺すも、子孫之れを守らず、隱德を施して、子孫に餘慶を享けしむるに如くは無いのである。然るに、今人、多くは、子孫の克く守らざる金を蓄へ、或は書を積んで遺さうとはするが、隱德を施さうとする者は、至つて少ない。男爵を授くると云へば、一議に及ばず金を出す成金はあるであらうが、隱れたる善行を心懸ける者は稀れである。近來いろ〳〵の社會的事業に資財を投ずる樣な篤行も、ぽつ〳〵耳にはするが、功德なきに喜捨する者は、餘り見當らぬ。釋迦にしろ、基督にしろ、將た、孔子にしろ、後世敎祖と仰がるゝ所以は、世の爲め人の爲め、一身を犧牲に供することに依つて求め得たる宗旨の始祖であるからで、犧牲の對象は決して、直接の報酬では無い。釋尊が、富四海を保つ底の王者の勞耀を棄てられたのは、何も報酬を望まれたのでは無

い。楠公の赤心も、報酬の爲めに捧げたのではなかつた。若し、爾うした心懸けであれば、七たび人間に生れて國賊を滅さうなどゝ云ふ悲壯なる言葉が發せらるゝ筈が無い。否な、楠公にして報酬を望んだならば、他に幾らも好い方法があつたに違ひない。彼の北條時賴が身を雲水に窶して、諸國を遍歷し、民情を視察したのも報酬を受けんが爲めでは無かつた。時賴は夫れ程せずとも意のまゝに自己の慾求を滿たすことが出來たのである。又、相模太郎は、元寇を殲滅して國難を救うたが、位は從五位に過ぎなかつた。北米合衆國の國祖、ワシントンは、大功業を就して、而も、自ら其の功に處らず、獨立戰爭の終りたる後、國民議會に於て、議會はワシントンの勳功を頌した。ワシントンは之れに對して答辭を述べんが爲め起つたが、彼れの肢體は戰き、唇はふるひ、囁々として立ち辣んで終つた。之れを見たるロビンソンは、ワシントンの心事を了解して、謙遜の德を稱へ、其場を取繕つた。ワシントンほどの勇士が、其の勳功を表彰されて、恰も群集の前に連れ出されたる野孃の

如く羞むだと云ふのは、畢竟、彼れが大功業に對する報酬を豫期しなかつたからである。否らずんば、彼れは誇らかに答辯を述べたであらう。

四、名人巨匠の心懸け

馬琴やシエクスピアの著作や、ラフエラの作品を見ても、名人巨匠の心懸けは、凡人の企及し難い點がある。馬琴の小説を讀むと、近來の思想と合はない節もあり殊に總體の調子が古めかしいとは云へ、克く人情の機微に觸れ、讀者を魅了する力を有つて居る。繪畫の如きも、新らしいものは其形は整つて居るが、之れを熟視すると氣魂が無い。古名人の描いたものは、其人の精神が畫圖の中に生きて居るやうに思はれる。夫れも道理、古名人は畫の爲めに畫を描くので、阿賭物の爲めには描かなかつたからである。

昔、伊勢に月僊といふ僧があつて、畫家として知られて居た。然るに、僧侶にして畫家たるの身を以て、甚だ錢を愛し、人の畫を囑するあれば、必ず禮金を受けて描く。其の態度の卑劣なる言語同斷で、時人に指彈されつゝ平然として意に介しない。而して、指彈する者も、亦、月僊の畫は認めて居つた。或時、某處の遊女の賴みを受けて、衣の裏に畫を描いた。若し、氣骨のある畫家ならば、無論、描く筈は無いのだが、月僊は、一向、頓著しない。立派に描き上げた畫を、自身、遊女が許に持參して謝金を請求した。遊女は、心あつて爲たことか知らぬが、金を足に載せて月僊の前に差し出した。月僊は有り難しとばかり、其の金を受け、受取つて歸つた。斯くの如く金に對する月僊は、殆んど、耻も外聞も無い狀であつたが、其の死後、月僊は集めた金を悉く散じて、鰥寡孤獨を賑恤し、一厘も貯蓄しなかつたことが判り、人々、皆、奇異の感に擊たれたといふことである。想ふに、月僊の爲人を卑しみつゝ尙ほ賴畫者の多かつたのは、畫の出來が好かつた爲めで、良畫の出來たのは、月僊が報酬の爲めに描かなかつた爲めである。成程、畫代を受取つたには

相違ないが、それは慈善の爲めに取次ぎをしたに過ぎない。

是れを要するに、隱德即ち報酬の爲めにせざる善き行ひは、大乘敎の敎義に合つたもので、我が禪宗でも、大いに之れを奬勵して居る。而かも、近來、淸廉の風地を拂つて、報酬なきに善き行ひをする者が少い。譬へば、彼の勞働も自已の務めとして忠實に之れに從事する時は、勞働は神聖なりとも云へよう。さり乍ら、其の勞働の對價として、即ち、勞働の結果として、報酬を受くるにあらずして、單に報酬を得んが爲めにする勞働は、神聖でも何んでも無い。英國の敵は英國の富そのものであると喝破した者もある位で、富は必ずしも、其身其家を幸福にするものでは無い。由つて、人は隱德を、冥々裡に施し、獨自一個の故にあらずして、社會的に存ふるに越したことは無いのである。

生死往來雲變更

生死往來雲變更、　迷途覺路夢中行、
唯餘一事醒猶記、　深草閑居夜雨聲、

（生死往來雲變更、迷途覺路夢中に行く、唯だ一事を餘して醒めて猶ほ記す、深草の閑居夜雨の聲、）

これは、日本に於ける曹洞宗の開祖、承陽大師の偈頌であつて、詩人の詩とは大いに趣きが違つて居る。起句の、

生死往來雲變更

は、人は、先づ、生まれるといふことがある。元來、吾人は何處から生まれ來たものであらうか。母の胎內から出たといふことは普通の考へであるが、父母以前の父母、又た其の以前の父母と遡り遡つて行くと、一番最初の父母は何處から生ま

れたものであらう。これは、何人にも、ちよつと、返答が出來なからうと思ふ。それから、死ぬといふことであるが、これ亦た死んで何處へ行くものであらう。これ等のことを考へて、だん〳〵深く探り入つてみると、何時しか歸路を忘れて、生死絶無のところに到る。生まれて曾て生まれず、死して曾て死せず、花紅にして紅ならず、柳綠にして綠ならざる境界に到達するのである。「往來」とは、何處から生まれて來て、何處に向つて死にゆくのか、乞食小屋から糞壺へか。金殿を下つて玉壺へ行くのか。さア、こゝが大なる疑問である。「雲變更」とは、欲しい惜しい憎い可愛いの煩惱は、これ心の大空を去來する雲である。陶淵明の詩に「夏雲奇峰多」といふ句があるが、なるほど、雲の姿は、虎ともなり、獅子ともなり、魔ともなり、佛ともなる。千態萬狀に變化して已まぬ。これを生死の往來に譬へたのは最も面白い。承句の、

迷途覺路夢中行

とは、悟るも夢なれば迷ふも夢、人生は、丁度、夢の中を行くやうなものである。さう云ふ意味で、眞箇の大覺は、一切迷悟を忘れてしまつた端的ぢや。それなら、其の大覺の境界はといふに、轉結二句の、

唯餘一事醒猶記、
深草閑居夜雨聲、

で、ショボ〳〵と雨の降る音が我れであるが、我れが此の雨の音であるか、雨と我れと不二一體の恍惚たる間にあるのである。

凡そ、宇宙間の森羅萬象は、よしと云ひ、あしと云ふも、悉く、之れ、浪花津の夢である。金剛經にも、

「一切有爲の法は、夢幻泡影の如く、如露亦た如電、應さに如是の觀をなすべし」

とある。實に、人生は、如露亦た如電ぢや。露の干ぬ間の朝顏の花に似て居る。併

しナ、

「大覺の後に至りて、始めて、大夢なるを知る」

と古人の云はれた如く、大覺の眼を開いて浮世の有樣を見渡すと、人といふ人が、悉く、夢といふ絹地に、平和とか戰爭とか快樂とか痛苦とかの幻の繪を描いて居る。金が欲しい、名譽が欲しい、美女を得たい、美男が得たいと、白晝に大目玉を光らせていろ〳〵の夢を見て居る。大觀すれば可憐の至りぢや。深草の閑居の夜雨の聲は、昔も、今も相變らずシボヨ〳〵と降りそゝいで、吾人の迷夢を醒ましつゝあるではないか。

法理と境界

法理を明らむるといふことゝ、境界を得るといふことゝは、別物である。決して一樣に見ては不可ない。

境界は何んなに練れて居る人であるからとて、法理といふ點に於ては、尙ほ、まだ〳〵通ぜないところがあるかも知れない。また、たとひ、法理は、微細に亘つて說き得るとしても、徹底悟道の境界は、夢にも知らぬことがあらう。

境界を得たるものが、法理を會することは炬を見る如きものであらうとも、法理より入るものは、粘著縛着、容易に境界を得ることが出來ないであらう。

宗通說通の自由自在を得んと欲したならば、必ず、俱に、兩者を兼備しなくてはならない。

禪は、法理を明らむると云ふことよりも、寧ろ、境界を練ると云ふことが主要の

眼目なのである。それ故に、

「不立文字、教外別傳」

といふ悟道の妙味は、全く、言詮不及、意路不到であつて、言語の及ぶところでは無い。若し、之れが道理を求めんとし、說かんすれば、箭過二新羅一。

俱胝竪指

（無門關第三則）

俱胝和尙、凡有二詰問一唯擧二一指一、後有二童子一、因外人問、和尙說二何法要一、童子亦竪二指頭一、胝聞遂以刀斷二其指一、童子負痛號哭而去、胝復召之、童子廻首、胝却竪二起指一、童子忽然領悟、

無門曰、俱胝並二童子一悟處不レ在二指頭上一、若向二者裏一見得、天龍同俱胝並童子與二自己一一串穿却、

頌曰

俱胝鈍置老天龍、利刃單提勘二小童一、
巨靈擡レ手無二多子一、分破華山千萬里、

（俱胝和尚、凡そ詰問する有れば、唯だ一指を擧す。後に童子あり、因に外人問ふ、和尚、何んの法要をか說く。童子、亦た、指頭を竪つ。胝、聞いて、遂ひに刀を以て其の指を斷つ。童子、負痛號哭して去る。胝、復た之れを召す。童子、首を廻らす。胝、却つて指を竪起す。童子、忽然として領悟す。

無門曰く、俱胝、並びに、童子の悟處、指頭上に在らず。若し、者裏に向つて見得せば、天龍、同じく、俱胝、並びに童子と自已と一串に穿却せん。

頌に曰く

俱胝鈍置す老天龍、利刃單提して小童を勘す、巨靈手を擡ぐるに多子なし、分破す華山の千萬重、

この公案は、瑞巖の主人公、趙州の柏樹子などゝ共に、昔から有名な公案ぢや。俱胝和尚といふのは、南嶽下五世の法孫である。此の俱胝和尚が、初め、住庵の時實際と名づける尼僧があつて、俱胝和尚の庵を訪ね、笠を被り、錫杖を持つたまゝ草鞋穿きでズイと入つて來た。さうして、俱胝和尚の坐つて居る禪牀を、三度、匝つて言ふには、

「さア道へ、道へ得たならば笠を脫がう」

何んでもよいから一言、道つてみよ、道ふことが出來たならば、笠を取つて禮拜もしようといふのぢや。かう問ひかけることが三度びであつたが、俱胝和尚は、終ひに一言も答へることが出來なかつた。そこで、尼僧が立ち去らうとすると、其時、丁度、晩景であつたから、

「日暮れでもある、一宿されたら何うか」

と云つたが、尼僧は、

「道ひ得ば即ち宿せん」

と云ふ。胝俱は相變らず答へることが出來ぬ。尼僧は、とう〳〵行つてしまつた。此に於て、俱胝和尚、熟ら歎息して曰ふには、

「自分は五尺の男子であり乍ら、男子の氣慨が無い。彼の尼僧の一拶に會つて、一言も答へが出來ないとは、耻かしい至りである」

と。大いに發憤して、此事（本分向上の一大事）を明らめんと、直ちに庵を捨てゝ、諸方を遍歴修行せんと決心した。すると、其夜、夢に山神が現れて、和尚に告げるには、

「和尚よ、此寺を捨てゝ行くには及ばない。近日、肉身の菩薩が來つて、和尚の爲めに説法されるであらう」

と。果して、次ぎの日、天龍和尚が到られた。この天龍和尚といふのは、馬祖下の尊宿、大梅法常禪師の法嗣である。俱胝和尚は喜び迎へて、禮を厚くし、具に前事（先日、尼僧の來た時の事）を陳べて敎へを請うた。すると、天龍和尚は、何も言はずに、唯だ指を一本、ヌーッと竪てゝ見せられた。俱胝和尚は、これを見ると、忽然、大悟した。從來の疑團、悉く、氷解して、大得力を得た。

さア此れからと云ふものは、人が何んと訊ねても、唯だ指を一本ヌーッと竪てゝ見せるだけであつた。

「如何なるか是れ祖師西來意」

と訊かれても、指一本である。

「如何なるか是れ佛法の大意」

と訊かれても指一本であつた。俱胝和尚の指頭禪は、今に至つて、尚ほ、盛んに叢林に喧傳されて居る。

この俱胝和尚に隨侍して居つた一人の小僧があつたが、平素、和尚が、何を問はれても、指一本竪てるばかりであるのを見て居るので、自分も其れを眞似て、他人から何か訊かれることがあると、直きに指を竪てゝ見せる。「小僧さん、お師匠樣は何をして居られます」すぐに指を竪てゝ見せる。「小僧さん、和尚樣が呼んで居られます」すぐに指を竪てゝ見せる。すると、此事を、俱胝和尚が聞かれて、或日、小

僧を捉らへ、鋭利な刄物で其指を切斷してしまはれた。小僧が、

「痛いーッ」

と悲鳴を擧げて走り去る背後から、和尚は、

「小僧」

と呼ばれた。小僧が振り返つて見ると、和尚は例の通り、ニユツと指を竪てた。此時、覺えず眞實のことが手に入つた。小僧は豁然として大悟徹底したのである。俱胝和尚の法を嗣いだのは、唯だ此の小僧一人であつたが、これも、一生涯、指一本で通したといふことである。かくて、俱胝和尚が將さに遷化せられんとするや、大衆に謂つて曰はれるには、

「我れ、天龍一指頭の禪を得てより、一生涯、受用不盡（用ひ盡くさぬ）であつた。領せんと要すや」

かう云ひながら、指を竪てゝ滅を示された。眞實、自分のものになつたならば、全く、一切時、一切處、受用不盡である。僅かに一本の指に過ぎないが、後世の尊宿が力を入れて批評して居られる。玄沙和尚は、

「我れ、當時、若し、見ば、指頭を拗折せん」

と云つて居られる。これに對して、雲居の錫和尚は、

「玄沙和尚の此言は、伊れを肯つて言つたのか、伊れを肯はずして言つたのか若し、伊れを肯つたものならば、何が故に、指頭を拗折せんと言つたか。若し伊れを肯はなかつたのならば、俱胝の過は何處にあるか」

と云つて居る。此時、皆さんならば、何う答へられるか。まア、次ぎの雲門和尚の批評を見られるがよい。雲門、曰く、

「俱胝や童子の悟處は、決しで、指頭上に無い。肉體の此の指には何んの關係もない。と云つて指を離れても居らぬ。さア箇中の妙味が會得出來たならば、天龍も、俱胝も、童子も、自己も、猫も、杓子も、花も、葉も、一串に芋刺に

することが出來る」

と。又た、頌を作つて曰く、

「俱胝鈍置す老天龍、利刃單提して小童を勘す、巨靈手を擡ぐるに多子なし、
分破す華山の千萬重」

鈍置とは「馬鹿にする」とか「用なきものにする」とかいふ意味で、俱胝は其の一指を竪てたところに、天龍を馬鹿にし、用なきものにしてしまつた。當に、天龍を用なきものに仕たのみでなく、三世の諸佛、歴代の祖師、一切合切、すべてを無用の長物たらしめた。單提は、單に提げるといふことで、手段方法によらず、直きに向上の端的を示し、以て小童を勘檢（試驗）し、接化された。以上は、起承二句の説明である。轉結の二句は、碧巖集の第三十二則の頌に、

斷際全機繼後蹤、　持來何必在從容、
巨靈擡手無多子、　分破華山千萬里、

とある轉結を、其儘、こゝへ持つて來たのである。支那の神話に、昔、黄河が源を石積山に發して西流し、龍門を越えて東流せんとしたが、華山と首陽との山脈が連亘して居つて、東流することが出來ない。そこで、巨靈神、即ち、河神が、その山脈を二つに裂き、太華、首陽の二山となし、以て河流を通じたので、今も華山の巔には其時の巨靈神の掌跡が殘つて居るといふことである。今、俱胝の力量は、彼の山脈を二つに裂いた巨靈神に比すべく、天堂、地獄、生死、涅槃、禪道も、佛法も、悉く分破し盡くして雜作はないといふのである。無多子とは「何んのことはない」とか「雜作はない」とかの意味で、華山は支那の五嶽の一ぢや。

肅宗、塔樣を請ふ

（碧巖集第十八則）

舉、肅宗皇帝、問二忠國師一、百年後所須何物、國師云、與老僧一作二箇無縫塔一、帝曰、請師塔樣、國師良久云、會麼、帝云、不レ會、國師云、吾有二付法弟子耽源一、却諳二此事一、請詔問レ之、國師遷化後、帝詔二耽源一、問二此意如何一、源云、湘之南潭之北、雪竇著語云、獨掌不二浪鳴一、中有二黃金一充二一國一、雪竇著語云、山形柱杖子、無影樹下合同船、雪竇著語云、海晏河清、瑠璃殿上無二知識一、雪竇著語云、拈了也、

頌

無縫塔、見還難、澄潭不レ許蒼龍蟠、層落々、影團々、千古萬

古與レ人看、

（舉す。肅宗皇帝、忠國師に問ふ、百年の後、須むる所何物ぞ。國師云く、老僧が與めに箇の無縫塔を作れ。帝曰く請ふ、師、塔樣。國師、良久して云はく、會すや。帝曰く、會せず。國師云はく、吾れに付法の弟子耽源あり、却つて此事を暗んず、請ふ詔りして之れを問へ。國師、遷化の後、帝耽源に詔りして、此意如何んと問ふ。源云く、湘の南、潭の北、雪竇著語して云ふ、獨掌浪りに鳴らず、中に黃金あつて一國に充つ、雪竇著語して云ふ、山形の柱杖子、無影樹下の合同船、雪竇著語して云ふ、海晏河清、瑠璃殿上に知識なし雪竇著語して云ふ、拈了也、

頌

無縫塔、見ること還た難し、澄潭許さず蒼龍の蟠るを、層落々、影團々、千古萬古人に與へて看せしむ、

此の則は、肅宗皇帝と忠國師の問答である。忠國師は、南陽慧忠國師のことであつて、六祖慧能禪師の法嗣であるから、青原行思や南嶽懷讓などとは、法脈上の兄弟である。

始め、南陽の白崖山香嚴寺に四十年間も隱棲して居られたが、玄宗皇帝の子の肅宗皇帝が鳳翔の光宅寺へ招請された。かくて、肅宗皇帝及び其子の代宗皇帝二代に亘つて、深く天子の歸依を受けられた。それから遷化されたのが、代宗の大曆十年であつたから、本則に肅宗皇帝とあるのは代宗皇帝の誤りであることは明かである。

垂示がないから、直きに本則に入る。「擧す」とは擧示するといふ意味で、雪竇和尙が大衆に擧示したのを記者が書き記した語である。忠國師が、いよ〳〵臨終だといふので、代宗皇帝は親しく病床を見舞れ、國師に問うて曰はれるには、

「百年の後、須むるところ何物ぞ」

百年も千年も御長命あつた後に、何か死後に御望みは御座いませぬか。かう云つて問はれたのである。すると、國師が云はれるには、

「老僧が與めに箇の無縫塔を作れ」

何も要らないが、一つ、土饅頭を作つて下さらぬか。かう云つて答へられた。一たい、塔の構造には、大別して二つの方法がある。一は縫稜級層の形狀に作るのであつて、一は縫稜級層の無い塔、即ち、無縫塔である。こゝに「無縫塔を作れ」と云はれたのは、「何も壯麗華美を極めた三重の塔や五重の塔を作るには及びませぬ。一箇の土饅頭で足つて居ります」との意味である。古來「縫ひ目の無い塔、即ち、無形の塔」だなどと解釋して居るのは牽强附會の說である。帝曰く、

「請ふ、師、塔樣」

それでは、貴僧の仰せられる土饅頭は、一たい、どんな形に作るのですか。無縫塔といつても、形狀は、いろ〳〵である。尖字形のもあれば、卵形のも、また、鐘形

のもあるのぢや。さて、かう帝に問ひ返されると、國師は、無言のまゝ、良久しくしてから、

「會せりや」

拙僧の申上げた土饅頭の意味が、陛下には御分りになりましたか。帝、曰く、

「會せず」

一向に分りませぬ。國師、曰く、

「吾れに付法の弟子、耽源あり。却つて、此事を暗んず。請ふ、詔して之れを問へ」

拙僧の法を嗣いだ弟子に耽源といふ者が御座います。此者を御召しになつて御訊ねになれば、此の意味を能く知つて居ります。かう答へたまゝ遷化してしまはれた。

あとで、帝は、耽源を探し求めて、之れを召され、此事を問はれると、四句一首の偈をもつて答へた。

湘之南兮潭之北、　中有黃金充一國、
無影樹下合同船、　瑠璃殿上無知識、

扨て偈の意は、「湘の南、潭の北」此の一句は無縫塔の位置を云つたものぢや。と云つて、南だの北だのといふ方角に拘つてはならぬ。元來、東西南北の無い南北である。湖南湖北は、此れを、「開花の前、落葉の後」と云つても同じことぢや。時間、空間を超越した絶對界のことである。「中に黃金ありて一國に充つ」此の絶對界に眞如法性の黃金が充滿して居る。花に入つては紅に柳に入つては綠となる。

第二句は、無縫塔の材料を示したものぢや。「無影樹下の合同船」正午になると、太陽が眞中に上るので、樹木に影が無くなる。即ち、太陽正午の意を以て絶對界を意味したものが無影樹である。合同船は乘合船ぢや。一切衆生、漏らすところ無く悉く此の舟に乘つて居る。宇宙の有ゆるものが、此の舟に乘り外したものが無いぢや。

第三句は、無縫塔中の有樣を云つたので、即ち、一味平等の境界を述べたものである。

「瑠璃殿上に知識なし」

第四句は、無縫塔の消息を述べたもので、內外玲瓏の瑠璃殿が、即ち、無縫塔であつて、一塵の見る可きなく、迷悟、凡聖、賢愚の沙汰を絕したものである。宇宙の萬靈が悉く皆な瑠璃殿上にあるところの唯我獨尊の佛であるといふのぢや。玆に知識とあるのは、世にいふ謂ゆる知識（悟つた禪僧）では無い。知音とか朋友とかの意であるが、もつと〳〵廣義に解して、無二知識」は佛も凡夫も、敵も味方も、親類も他人も、一切の差別相を絕して居るといふ意に見なければならぬ。

雪竇、第一句に着語（批評）して曰く、「獨掌浪りに鳴らず」と。隻手（獨掌）の音聲は滅多に鳴らぬ。即ち、隻手の音聲は聞えぬといふのが、表面の意で、底意は、それであるから、暫く正位を離れて南だ北だと方位を示して說くのだと云ふのぢや。

彼の有名な白隱禪師が、「隻手の聲」の公案は此句に起因したものである。

第二句に着語して曰く、「山形の拄杖子」と。山形とは、山から切つたばかりのまだ人工を加へないものゝ意で、拄杖は僧侶の老人杖、其の儘の無縫塔を丸出しにしたものだとの意ぢや。

第三句に着語して曰く、「海晏河淸」と。海も和き河も澄んで、至極、平和な無縫塔だとの意ぢや。

第四句に着語して曰く、「拈了也」拈じ了つた。即ち、これで無縫塔の說明はすんだとの意である。

次ぎに雪竇の頌である。「無縫塔」先づ、第一句に、宇宙萬象の本體を呈露した。無縫塔・無縫塔、此の無限大の宇宙は、これぞ即ち無縫塔である。「見ること還た難し」此の無縫塔は、世間で普通にいふ無縫塔とは違つて、殊更に無縫塔と稱さるゝ物があるので無いから、そんなものを見ようとしても、到底見ることの出來るも

のではない。還の字古來「カヘッテ」と訓ませて居るが、其れでは意義をなさぬ。「また」と訓むべきである。「澄潭に蒼龍の蟠るを許さず」澄潭は、國師が良久したるところを謂ふ。多くの人が、此の無縫塔を、國師の良久したところに見ようとするやうであるが、蒼龍たる國師の意は、其んな澄潭死水の中には居らぬ。澄潭死水の中に居るやうな龍は活龍では無い。「層落々、影團々、千古萬古、人に與へて看せしむ」それ其の無縫塔は、十方法界に至らぬ隈なく、誰れが目の前にも、層落々影團々として、千古萬古、聚えて居るでは無いか。落々は層が段々に重なつた形容團々は聚合つた影の形容。

盡大地これ汝の宿

一人の婆さんが、趙州和尚のところへ遣つて來た。和尚、これを見て、

「何か用かい」

と訊かれると、婆さん曰く、

「一夜の宿が御願ひいたし度う御座います」

和尚、曰く、

「お前さん、今、何處に居るのぢや」

盡大地、之れ、お前の宿ではないか。何を狼狽へくさつて、他人の許に求めて廻るのぢや。かう云はれると、婆さん、忍ち、呵々大笑して去つた。

扨ては、此の婆子、唯だの鼠ぢやなかつたわい。趙州和尚を一つ引つ掛けてやらうとして來たのぢやつた。危險い〳〵。

道はじ〳〵

昔、漸源が、師匠の道吾和尚のお伴をして、某家の葬式に出掛けた。其時、漸源が棺を叩いて、

「生か死か」

と問ひを發した。道吾和尚は、

「生とも道はず、死とも道はず」

と云はれた。生だの死だのと言へば、もう好肉上に瘡をつける。それが、漸源には分らぬので、葬式が濟んで歸る途中、漸源は、どうしても師匠に其れを言はせようと氣を苛立てゝ、

「道はずんば和尚を打たん」

と詰め寄つたが、和尚は、

「打つことは即ち打つに任す、道ふことは即ち道はず」

と云つて、何んとしても應ぜない。何か或るものが有つて、それを隱して殊更らに言はないのでは無い。演源は、とう〳〵師匠の頭をポカリと打つたが、遂ひに和尚は云はなかつた。

其後、漸源は、石霜和尚のところへ行つて、前の問答を繰り返して、

「生か死か」

と訊ねたが、石霜和尚も、やはり、

「生とも道はず、死とも亦た道はず」

と同じことを答へられた。そこで、

「何んとして　道はざる」

と詰ると、これ、また、

「道はず〳〵」

と答へられた。これを聞いて、始めて、漸源は、大悟したと云ふことである。

劉鐵磨の臺山

百丈懷海禪師の法嗣に、溈山靈祐禪師といふのがある。司馬頭陀に見込まれて、潭州の溈山を開き其處に寺を建て、大衆を說得された。禪僧中でも特に傑物である。こゝに溈山を去る十里（支那の一里は日本の六町）の處に、俗姓劉氏の娘で、鐵磨と綽名をされて居つた尼さんが住んで居た。夙に靈祐禪師に參禪して見性悟道し、機鋒頗る峻烈なるものがあつた。或る時、此の劉鐵磨が溈山和尙を訪れた。溈山は尼さんが入つて來るのを見るや否や。

「老牸牛、汝、來れりや」

溈山は、常日頃、自ら「我れ死後は檀越家の水牯牛（水車場の牡牛）と生れ變つて來る」と言つて居た程で、此の時も、例の口癖が出たと見えて、「やア老ぼれの牝牛どのよ來さつしやつたか」とやつた。牸牛は牝牛である。天桂禪師は、此の語に異

類中行の譽きがあると言つて居られるぢや。異類とは人間以外の生物、其の人間以外の生物の牛に交つて、之れが濟度に任ずることが中行である。溈山は天上界にも生れず、人間界にも生れず、一個水牛牯となつて異類中行を爲さん、汝、鐵磨も亦た、此の慈悲行をなし得るに足るものであるとして、こゝに老牸牛と呼んだのぢや。圜悟は此の語に「探竿影草」と着語（批評）をして居る。老牸牛などとオダテ、置いて、チャーンと探り棒を入れて居るといふのぢや。ところが鐵磨は、

「來日、臺山に大會齊（大供養）あり。和尙、還た去る（行く）や」

近いうちに五臺山で大法會があるさうなが、和尙さんも行かれますかえ。と斯樣に奇想天外な問ひを發した。臺山は五臺山で、山西省の代州太原府五臺縣にある。我が國の高野山といつたやうなところで、山上に五つの峰があつて、其處に、一百有餘の寺が散在して居る。支那佛敎史上に於て有名な處である。溈山は湖南省の潭州長沙府にあつて、其の間相距ること、數千里（支那の里程で）ぢやさうな。然るに、

明日か明後日か知らぬが、近いうちに其處で大法會があるが、出掛けて行くのかと云ふのである。隨分、突飛な問ひだ。大會齊とは大供養で、上は佛菩薩から下は人天鬼畜に到るまで、殘らず供養する大法會である。圓悟は、「箭、虛しく發せず」と着語して居る。劉鐵磨の發つた矢には虛がなかつた。溈山の胸を發矢と射止めたと云ふのである。また、「大唐鼓を打てば新羅舞ふ」とも着語して居る。溈山と鐵磨との應對は、大唐と新羅と距離は遠いが、調子が能く合つて、實に知音同志の出會であると云ふのぢや。さア溈山は何んと答へるか。「溈山身を放つて臥す」とある。

「放は」從來「はなつ」と訓んで居るが「ほしいまゝ」と訓ずるのが至當であつて勝手氣儘に大の字なりと云つたところぢや。鐵磨の問ひも奇拔なれば、溈山の答ひも亦た奇拔ぢや。此の邊の消息は人々、冷暖自知するより外に仕方がない。「磨便ち去る」で、これを見た鐵磨は挨拶もせずに、サツサと歸つて行つた。まことに任運無作の活機輪である。

雲は青霄に在り

すべて、禪家の商量は、道でも橋でも石ころでも、一草一木、何んでも構はぬ、その場にあるものを直きに捕へて宗旨を全提するので、これは禪宗の特色である。必ずしも、神とか、佛とかを借りて來なければならぬと云ふことは無い。手に委せて其場のものを應用するのである。だから、故人も、

「拈じ來つて着々親し」

と云つて居られる。決して、遠方に求めず、其場〳〵の事物に即して親しく拈じ行くところに、禪宗の面白味があるのである。

李翺は、唐代の大儒であるるが、或時、藥山禪師を訪ねたことがある。丁度、藥山ば讀經でもして居つたとみえて、口の中をモグ〳〵させて居つた。その樣子が、如何にも芋堀坊主らしかつたので、李翺は腹の中で輕蔑した。こんな詰らぬ坊主が

藥山かと、袖振り拂つて出て行かうとすると、藥山は、ちよつと振り返つて、

「汝、何ぞ耳を尊んで身を卑しむ」

と言はれた。すると、李翺も元來が馬鹿でない、再び、坐に歸り、禮をなして問うて言ふには、

「佛法ギリ〳〵の道理は如何」

と。藥山は手を一上一下して、

「會すや」

分るかと言はれたが、李翺には、一向、分らないので、

「會せず」

分りませんと云ふと、藥山は間に髪を入れず、

「雲は靑天にあり、水は瓶にあり」

と云はれた。まつたく、雲は蒼空に在り、水は瓶の中に在る。併し、早合點して、

禪宗は其身其儘であるなどと思ふと大きな間違ひである。こゝは各人の工夫を要するところである。李翺は其れを聞くと、言下に大悟した。そして、偈を述べて曰ふには、

鍊得身形似鶴形、千株松下兩函經、
我來問道無餘說、雲在青霄水在瓶、

德山和尚の機鋒

德山和尚は、西蜀の人である。初めは法相三論を學び、教相に明かで、殊に金剛經の講義が最も特意であつた。當時、支那の南方で禪宗が隆盛を極め、漫りに教外別傳不立文字を唱へ、即心是佛を說いて世を惑亂すると聞き、此の邪教を打破せずんば、佛教の前途が危いと、金剛經の疏抄を負ひ奮然として南方に向つて出發した。やがて澧州までやつて來て、とある路傍の茶店に憩ひ、婆さんが賣つて居る餅を買つて晝食をしようとした。すると、婆さんが曰ふには、

「載するところのものは是れ何んぞ」

お前さんの背に負ふて御座る荷物はそれは何んで御座いますかと問うた。德山曰く

「金剛經の疏抄」

此れは金剛經といふ有難い御經の講釋をしたものだ。婆さん曰く、

「我れに一問あり。儞、若し答へ得ば、油糍を布施して點心を作さん、若し答へ得ずんば別處に買ひ去れ」

然らば、お前さんに問ひたいことが御座る。若し答へが出來たならば此の餅を全部お前さんに差し上げるが、答へが出來なかつたならば、此の餅は少しも賣ることが出來ない。他の店へ行つて御買ひなされ、かう云つたのである。德山曰く、

「但だ問へ」

承知をいたした、何なりと問ふがよい。婆さん曰く、

「金剛經に曰く、過去心も得べからず、現在心も得べからず、と。上座、那箇の心をか點ぜんと欲するや」

金剛經に曰つてあるが、過去心も之れを求むるに得ることが出來ぬ。現在心も之れを求むるに得ることが出來ぬ。未來心も同じくその通りであると。全體、お前さんが晝食しようといふ心は、何の心で御座るか、かう問はれて德山はハタと詰まつて

遂ひに答へることが出來なかつた。そこで、婆さんに問ふて云ふには、

「近所、何んの宗師かある」

此の近くに誰れか名師は居られぬか。茶店に此れほどの婆さんが居る。必ずや近くに大善知識が居られるに違ひないと見て取つたところは、流石に德山の常人でないことが分る。婆さん曰く、

「五里外に龍潭和尚あり」

此處から五里ほど行つたところに、龍潭和尚といふ大德があると敎へた。これを聞くや、德山は、早速、龍潭の許を訪ねた。纔かに門を入るか入らぬに、大聲で言つて曰く、

「久しく龍潭と響く、到來するに及んで潭も見ず龍も亦た現はれず」

龍潭〳〵と、龍潭の名前は久しく世の中に鳴り響いて居るが、扨て來て見れば聞くほどに深い潭も無ければ、一向、水上に躍る龍の姿も見えぬわい。龍潭は何處に居

るぞといつた意氣込みである。眼中、既に三世の諸佛も無い勢ひだ。時に龍潭は屏風の後に居たが、ズイと出て來て曰ふには、

「子、親しく龍潭に至れり」

お前は親しく龍潭に至つて居るぢやないか。これは本分事全提の有樣ぢや。蓋天蓋地、是れ龍潭である。お前は一歩も動かずして、龍潭に至つて居るのである。若し此れ以外に龍潭を求めたならば、相去ること千萬里ぢや。德山は及ち禮拜して退きこれから和尙に師事したのである。

或る夜、入室參問して夜深くなつた。龍潭曰く、

「夜、深けたり。子、何んぞ下り去らざる」

最う夜も更けた。お前も下つたがよいではないか。かう云はれて、德山は珍重（辭禮）して簾を揭げて外に出た。外には出たが眞暗だ。還り來つて曰く、

「門外暗し」

和尙、外は暗くて歩かれませぬ。かう云ふと、龍潭は、紙燭に火を點じて與へた。德山が近寄つて受け取らうとする一刹那に、龍潭はフッと吹き消して終つた。同時に德山は忽然として省悟したのである。乃ち禮拜した。龍潭曰く、

「子、箇の何をか見て禮拜するや」

お前は何物を悟り得て其んなに有難つてゐるのか、德山曰く、

「某甲、今よりのち、更に天下の老和尙の舌頭（言語）を疑はず」

昨日までは、即心是佛と聞いて、是れ邪道である、世を惑はすものであると怒つたが、今や疑滯頓に氷解し去つて、今後、決して、天下の老和尙のお言葉を疑ひませぬと言つた。明日、龍潭、上堂說法して曰く、

「此の中、箇の漢あり。牙は劍樹の如く、口は血盆に似たり。一棒に打てども頭を回らさず。他時、孤峰頂上に向つて吾が道を立し去らん」

此の大衆の中に一箇の英靈漢が居る。牙は劍樹の如く口は血盆に似て、まことに勇

猛俊利の漢である。一棒に打てども頭を回らさずで、決して、生死を顧るやうな奴ではない。他日、必ず、孤峰頂上に向つて、即ち、本地の家郷に獨立して、吾が道を建立するであらうと賞められた。すると、德山はすぐに起ち上つて、曾ては虎の子のやうに大切にして居つた金剛經の疏抄を法堂の前に持ち出し、炬火を差上げて曰ふには、

「諸〳〵の玄辨を窮むるも、一毫を大虛に置くが如し、世間の樞機を竭すとも、一滴を巨壑に投ずるに似たり」

いろ〳〵と玄妙な辯舌を極め、世間の樞機を竭くしたところで、一本の毛を大虛に置き、一滴の水を巨壑に垂らすやうなものである。文字や言句に拘つて理窟ばかりを捏ね廻したところで、何んの役にも立つもので無い。直ちに自己心上に向つて眼を開かねばならぬ。かう言つて遂ひに疏抄を燒いてしまつた。

かくて德山は龍潭の法を嗣いだのであるが、その家風たるや、嶮峻極まるものであつて、「言ひ得るも三十棒、言ひ得ざるも三十棒、サア道へ、サア道へ」と、道つても道はなくても三十棒を與へる。棒使ひの德山といつて、今に至るまで有名ぢや。

曾て、潙山が化を布くこと盛んなるを聞き、一つ潙山の禪機を探らうと云ふので、潙山のところへやつて行つた。潙山は弟子の仰山と共に、潙仰宗の開祖と仰がれる大德で、これ又た禪門屈指の英傑である。德山が潙山の許に到るや、包を解かずとある、旅支度のまゝでドン〳〵法堂に入つて行つて、東から西へ、西から東へ、行つたり來たりした。ギロリ〳〵と左右を視廻はしながら、

「無々」

何んにも無い、何んにも無いと言つて、ツイと出てしまつた。まことに無禮極まる仕打である。彼れはかく傍若無人の振舞をして、先方が何う出るかと釣り針を垂れた。即ち潙山を試驗したのである。最うこれで試驗は濟んだとサッサと門まで出て行つたが、也早々なるを得じで、待て〳〵最う少し丁寧に勘撿せねばならぬと言つ

て、今度はチャンと禮儀を整へ、再び入つて潙山に相見した。此の時潙山は座次せりとあつて大衆と共に各自の席について居たが、德山は坐具（袈裟を着けた僧が身體を地（疊にでも）につけて、禮拜する時、又は坐る時に用ひる風呂敷のやうな敷物、用ひずして持つて居る時は左の手頸に懸けて居る）を提起して、

「和尚」

と呼んだ、座具を提起するのは、禪僧の禮儀であつて、軍人や警官のする擧手の禮に當るものである。潙山は此れに答禮せんと、靜かに傍にあつた拂子を取らうとしたが、德山はそれを待たず、一喝を下し、袖を拂つて出で去つた。なか〳〵の活作略であるわい。併しながら、潙山が德山を恐れたなぞと見當違ひをすまいぞ。圜悟が評して居る「潙山また忙ならず」と落ち付き拂つたものだ。匆忙の樣子は寸毫もない。丁度、南面して諸侯の入貢を受くるが如しぢや。

扨て、其の晩、潙山が首座に向つて問ふて曰く、

「適來の新到、何んのところにか在る」

適來は「先きほどやつて來たといふほどの意、新到は新入門者ぢや。先き程やつて來た彼の新入門者は何處に居るかい。首座曰く、

「當時、法堂を背却し、草鞋を着けて出で去れり」

當時は「彼の時」である。彼の時、法堂にお尻を向けてサツサと出て行つてしまひました、と。潙山曰く、

「此の子、已後、孤峰頂上に草庵を盤結して、佛を呵し祖を罵り去ることあらん。此の子とは「此の男」とか「彼の男」とかいふ意ぢや。子は男子の意味である。彼の男は、已後、必ずや孤峰頂上に草庵を盤結して（本分の境、大智惠門の境界に住して佛を呵し、祖を罵り去る（獨立不羈の境界）であらうと賞めた。雪竇着語（批評）して曰く、雪上に霜を加ふると。白いものゝ上に白いものを加へたと同じで、潙山の賞讃は餘計なお世話だと云ふのぢや。誰れだつて孤峰頂上に草庵を盤結して

獨立不羈の境界でない者は無い。佛祖も、悟りも、迷ひも、何處に其んなものがある。そんな事を言ふのは已に第二第三に墮在して居るといふのぢや。が、雪竇の着語も、之れまた、同じく頭上に頭を置くものである。總べてが言句の上には無い。皆さん、眞意が分りましたかい。

好雪片々の話

馬祖下百三十九人の龍象中に、其の人ありと稱せられた龐居士は、衡州衡陽縣の人で、姓を龐、名を蘊、字を道玄といつた。本と儒を以て業として居つたが、後、遂に佛法に歸依した。初めは南獄の石頭禪師に參じた。居士、石頭に見えて問うて曰く、

「萬法と侶たらざる者これ何人ぞ」

萬法とは一切萬法ぢや。山川草木、鳥獸魚蟲、有りと凡ゆる差別界の諸現象と侶たらざるものは、之れ何人ぞやと問うたのである。すると石頭禪師は、直ちに自分の手を擧げて、自分の口を掩うた。此の瞬間に、居士は豁然としたのぢや。其の後、江西の馬祖大師に參じて、また、前同樣の問ひを發した。大師曰く、

「爾が一口に西江の水を吸盡せんを待つて即ち汝に向つて道はん」

儞が彼の西江の水を飲み乾してしまふのを待つて、其の時、萬法と侶たらざる者を敎へてやらう。かう答へられると、居士は、廓然大悟されたといふ話も傳つて居る。

扨て、居士の得力は尋常底でなかつたが、其の家庭が亦た珍らしい禪的家庭ぢやつた。靈照女といふのは、居士の娘である。居士が襄陽に住して居た時に、此の靈照女は竹漉を作つて、毎日、此れを賣り歩き、其れを生活費にあてゝ居つた。居士が此の世を去らんとするや、死ぬならば日中が可からうといふので、娘をして出でて、日の中するを見せしめた。娘はやがて家に入るや、日の午に及びしを報ずると共に、且つ、時、恰も蝕ありといふ。父の居士が此れを見んとして戸外に出ると、娘は直ぐに父の座に登つて合掌しつゝ坐亡してしまつた。居士、笑つて曰く、

「わが娘の鋒、捷なり」

と。其の後、七日ほど經つて手を枕にして示寂した。其の時の偈が、

但願空諸所有。慎勿實諸所無。

といふのぢや。まことに生死自在なものぢや。

此の龐居士が、藥山惟儼禪師を訪はれ、將に辭し去らんとせらるゝや、藥山禪師も、知名の大居士のことであるから、送禮も叮嚀にされ、十人の禪客をして門前まで送らせられた。時、まさに嚴冬、居士はチラ〳〵落ちて來る雪を指しながら、

「好雪片々別處に落ちず」

あゝ美しい雪だ。これは、全體、何處へ落ちるのぢやらう。決して、別處ではないぞ。別處でなければ何處ぢや。さア道へ、さア道へ。かう云つて十人の禪客を顧られた言葉の中に針がある。餌を垂れて龍を釣らうとするのだ。風なきに浪を起し雲を放つて龍を招かうとするのぢや。浮かりすると引つかゝるぞ。

時に全禪客といふものがあつて、衆を出でて曰く、

「何んのところにか落在す」

然らば、何處へ落ちますか。落處といふ言葉について廻つたから、遂う〳〵引つかつた。全禪客の言が終るか終らぬに、居士はピシャリッと全禪客の横面を見舞はれた。全曰く、

「草々なることを得ざれ」

居士の一掌は慈悲の至りぢや。そんなことで好雪片々の道理が會せられるものか。好雪とか落處とか、言葉の先きについて廻るからいけないのぢや。悲しいかな此の禪客には、此の親切が分らなかつた。「そのやうに麁相しく亂暴なことをなさるな」と大不平を並べた。居士曰く、

「亂暴をするとは何事ぢや。そんなことでお前は禪客面がして居られるか。今に閻魔王の前へ出た時に。閻魔は中々許さぬぞ」

前にはピシャリとやられ、今度は頭から惡水をぶつかけられた。好雪片々別處に落ちず、皆なは此語が解つたかナ。如何に之れを商量するぞ。銘々が全禪客の地

位になつて見るがよい。さア何う答へる。全曰く、

「居士作麼生」

それなら居士の意見は何うで御座る。何處までも言葉について廻る奴ぢや。何時までマゴついて居るかやい。居士は斯く言はぬばかりに、重ねてピシャリと一掌を與へられた。扨て曰く、

「眼見て盲の如く、口說いて啞の如し」

眼があつても盲同然、口があつても啞同然ぢや。此の好雪片々たる景色が解らぬのか。見よ落ち場が分らぬか。罵倒しながらチャーント落處を示して御座るぢや。雪竇和尚が別に自家の意見を述べて御座るよ。

「初問のところに但だ雪團を握つて打たん」

納ならば好雪片々別處に落ちずと、初問を發した時に、イキナリ雪團（雪のかたまり）を一握り握つて打つつけてやつたであらうに。かう雪竇の外形ばかりを眞似た

ところで駄目である。

禾山の解打皷

禾山和尚が或時、垂語して曰はれるには、

「習學これを聞といひ、絶學これを隣といふ。此の二者を過ぐるもの、是れを眞過といふ」

と。これは肇法師の寶藏論中にある語である。今ま、禾山和尚は此語を引いてきて、祖師門下の直指の教へに當てられたものである。習學とは、佛道を修行することで、佛道の修行は苦界を離れて安樂の境に住する爲めである。已に苦界を離れ、安樂の境に住するを得て、も早や此れ以上學ぶことがないといふ位に至つたのが、絶學、又たは、無學であるが、まだ大覺の極致でない。辛と其の附近まで至つたものである。故に、之れを隣（となり）といふ。それで、此の二つのものを超越してしまつたのが眞過である。大體の意味は斯うであるが、禾山は此語を掲げて學人を釣らん

と試みたのであるが一僧があつて、出でゝ問ふ、

「如何なるか是れ眞過」

と、禾山、曰く、

「解打鼓」

太鼓をたゝくことを知つて居るよの意味である。禾山は、此僧が、眞過とか佛とか悟とかいふものを有難がつて珍重して居る執見を打破せんが爲めに、此の何處からも齒の立てやうのない鐵饅頭を投げ出されたのである。すると、また、問ふ、

「如何なるか是れ眞諦」

禾山和尙は、また、

「解打鼓」

と同じことを答へられた。そこで、また問ふ。

「即心即佛は即ち問はず、如何なるか是れ非心非佛」

と。禾山はまた〳〵

「解打鼓」

と同じことを答へられた。僧、また問ふ。

「向上の人、來るとき如何んか接せん」

と。禾山、曰く、

「解打鼓」

どこまでも同じ答への一本槍である。これは、俱底和尙が、誰れが何んと訊ねても、たゞ指一本堅てられたと同じ答處で、言句を追つて廻つては、遂ひに不會である。禾山和尙の「解打鼓」は、盡大地、解打鼓のほかに出ないのである。今ま、此僧の問端は、いろ〳〵言葉は違つて居るが、意味は初問のほかに出ない。眞諦といふも、眞過と云ふも、非心非佛といふも、決して、別の意味ではない。禾山の意は眞箇の大道は、かゝる名相とは遠くして遠い、言句について廻つてゐたのでは、遂ひに不

可得であるぞと示されたものである。各人は、宜しく、工夫一番するがよい。

驢を渡し馬を渡す

趙州從諗禪師といふのは、澤山の古德の中でも、特に傑出して居る人である。趙州は地名であつて、地名が名となつたので、臨濟でも洞山でも、其の他の古德が多く左うである。この趙州和尙の住せられた觀音院は、趙州城の東にあつて、彼の有名な石橋を去ること十里とある。支那の一里は、我國の六町であるから、十里といつても、我國の一里餘りである。この石橋は、天臺山の石橋と、南嶽の石橋と、それに、此の趙州の石橋を併せて三石橋と稱せられて、天下に有名なものである。或時、一僧が訪れて、

「久しく趙州の石橋と響く、到り來れば只だ略彴を見る」

趙州の石橋といつて、大層な評判であるが、何んだ、來て見ると、此んな丸木橋かと云ふのである。略彴は、獨木橋、即ち丸木橋のことである。これは借事問とい

つて、事に借りて宗旨を問うたので、趙州和尚の力量如何んを試驗せんとする希望を有つて居る。即ち、趙州和尚は大善知識として天下に其名が鳴つて居るが、來てみると、何んのことだ、老耄の凡僧ぢやないかといふのが眞意である。すると趙州和尚は、

「汝、只だ略彴を見て、且らく石橋を見ず」

お前の目には、丸木橋ばかり見えて、石橋が見えない。即ち、お前のやうな明盲には、目前に大人物が居つても分らんといふ答へである。實に、此答は面白い。まことに淡白りした答へであるが、中に、不可言の深意がある。禪門では、これを探竿、即ち探り竿と云ふ。此僧、果して趙州の釣針にかゝつて來た。僧、問ふ。

「如何なるか是れ石橋」

然らば、本當の石橋はどんなもので御座るかと訊ねた。それに對する趙州の答へは實に樂な、自由な、解脱したものである。

「驢を渡し馬を渡す」

驢馬も通れば、馱馬も通る。天子も渡れば、乞食も渡る。風も吹けば、月も照る。宇宙萬象の其儘が本地の風光で、本地の風光は宇宙の大道である。森羅萬象は悉く是れによつて、各、その自性を發揮して活動してをる。此の石橋は、本地の風光を意味したものである。

どうしても、本地の風光、即ち、自性を徹見しなければ、本當のところは會得が出來まい。今まは唯だ文字だけについて說明をしたのであるが、趙州和尚の答へは實にアク拔けのしたものだ。禪も、こゝまで磨き上げると、禪らしい臭みは微塵もない、圭角の取れたものである。

劈急箭なり

達磨大師が二祖を接得された時も左うであつたが、黄檗でも、臨濟でも、德山でも、雲門でも、皆な其の手段は孤危險峻で、實に側へも寄り付けぬほど手嚴しかつた。併し、これは、殊更らに宗旨も惜しんでの故ではない。修行者に、自發的に、十分力を現はさせるには、是れでなければ不可ないからである。頭を撫で、手を引くやうなことをしては、却つて、學人の爲めにならぬ。突き落し〳〵、叩いて叩いて叩きつけると、學人は奮激し〳〵、自ら鞭ちて油斷なく修行し、師家の手を借らずして力を現はしてくるやうになる。師家は之れを待つて居るのである。

斯くの如き次第ではあるが、趙州には少しも孤危の風が見えぬ。德山の棒を行じ臨濟の喝を行ずる如きとは違つて、唯だ言句を以て、人を殺活する。ところで、それが亦た、痛棒より痛く、熱喝よりも熱して居る。だから、雪竇和尚も、

「海に入つては還つて須らく巨鼇を釣るべし。笑ふに堪へたり同時の灌溪老」

と賞讃してをる。大海に飛び込んでは鰯や海老が相手ではない。巨鼇が相手である。鮒も目高も餘さず救ひ取らうとするのが、阿彌陀佛の本願であつて、賢い者より馬鹿が大切であるさうだが、禪宗は是れと正反對である。先づ優れた者を相手にしやうとする。かくの如く佛敎は廣汎で、いろ〳〵な方面が開かれて居る。趙州は目高や鮒が相手ではない。

灌溪和尚は、臨濟下の人である。或時、一僧があつて、和尚に向ひ、

「久しく灌溪と響く、到來するに及んで、只だ箇の漚麻池を見る」

漚麻池とは、麻を漚すだけの小さな池といふので、眞意は前の趙州和尚に對する問ひと同じである。すると、灌溪は、

「汝、漚麻池を見て、且らく灌溪を見ず」

と答へると、僧は、

「如何なるか是れ灌溪」

と問ひを發したから、

「劈箭急なり」

と答へられた。此の灌溪の激流は强弓で射る弓よりも早いぞ、この急流の中に入ると、生死迷悟すべて押し流してしまふといふのである。雪竇の評は、趙州を賞めんが爲めに、暫く灌溪を押へたまでゞ、語に轉ぜられて優劣をつけべきでない。が、趙州の答へは圓熟して居る。古の多くの古德中に卓然たるものがあると思ふ。

又た一點あり

また、或時、趙州和尙が、庭を掃いて居られると、一僧があつて、和尙に向ひ、

「和尙は、是れ、善知識なり。什麼としてか塵ある」

と訊ねると、和尙は、

「外來底」

外から來たのだ。本來具有の塵はないぞと答へられると、又た問うて曰く、

「淸淨の伽藍、什麼としてか塵ある」

と。和尙、曰く、

「又た一點あり」

そら、又た一つ、飛んで來た、かう云つて答へられた。汝、一箇を添へ得たの意味である。

大道、長安に通ず

また、一僧があつて、和尚に向ひ、

「如何なるが是れ道」

といつて訊ねると、

「墻外底」

墻の外を見よ、道は縱横に通じて居る。――大道は一切處に行き渉つて居る――

と答へられると、僧は、

「這箇の道を問はず、大道を問う」

と云ふ。趙州は、

「大道、長安に通ず」

大道は、都長安まで眞直ぐに通じて居る――至道無難、異途なし、一本筋の大道

である――と答へられた。皆な斯ういふ風に日常の語を使用して、却つて人を殺活する手段を用ひられたものである。

鉢盂を洗ひ去れ

また、或時、一僧が趙州和尚のところへ來て、

「學人乍入叢林、乞ふ、師、指示せよ」

私は、今回、當僧堂に掛錫させて戴きましたが、どうか、今後、宜しく御指導を御願ひいたしますと云つて、入門の挨拶をした。すると、和尚は、

「喫粥し了れりや也た未だしや」

お前さん、御飯を食べたか未だかと問はれたから、

「喫し了る」

ハイ最う食べてしまひました。と答へると、和尚は、

「鉢盂を洗ひ去れ」

そんなら、食器を、清潔に洗つて置けと言はれた。

まことに、平凡な問答であるが、一體學人が、五年、十年と修行を積んで居るうちに、大層偉くなつたといふ重荷を擔いで居るものである。また、悟つたにしたところで、その悟りの臭ひがコビリついて居る間は、本當の悟りでは無い。ちやうどお粥を食べたあと、食器に滓が附着してをるやうでは不可ない。悟りも、迷ひも、一切を放下してしまはなければならぬ。そこを敎へられたものである。が、此の萬事放下着の境界は容易なものでは無いよ。

我れ青州に在りて

すべて、宗師家が學人を接得する際には、どんなことでも、言句に上さうと思ひば、自由自在に言句になつて出るが、併し、その言句たるや、常識を超えた言句であるから、天下無比である。一僧が趙州和尚に向つて、

「萬法、一に歸すと、一、何れのところにか歸す」

宇宙の森羅萬象は、千差萬別であるが、畢竟一味平等の本體界たる一に歸入すると云ふことであります。然らば、此の一味平等の本體界たる一は、また、何處へ歸入いたしますかと云ふ問ひである。すると、趙州は、

「我れ青州に在りて、一領の布衫を作る、重きこと七斤」

と、ちよつと考へると、途徹もないことを答へて居られる。これ佛見法見の論量を超越して居る答へであつて、意根を坐斷して直下に趙州の奥裡に參ぜなければ、此

間の消息は窺ひ得られぬ。

洞山の寒暑回避

一僧あり、洞山和尚に向つて問ふて曰く、

「寒暑到來せば如何んか廻避せん」

寒暑が到來した場合に、何うして之れを廻避たものでせう。斯う云つて問ふた。此の洞山和尚といふのは、曹山和尚と共に曹洞宗の開祖であつて、其の名を良价といひ、悟本大師のことである。彼の「五位の頌」や「寶鏡三昧」は此の洞山和尚の作ぢや。寒暑到來とは、暫く此句を用ひたまでで、苦樂到來と云つても可い。和尚、答へて曰く、

「何んぞ無寒暑の處に向つて去らざる」

暑い寒いが厭であるならば、暑い寒いの無い場所へ行くが可い。生死や苦樂が恐いならば、不生不滅の佛境界に到れ、其處は本來無寒暑である。苦も無ければ樂も無

い。僧曰く、

「如何なるか是れ無寒暑の處」

然らば何んなところが無寒暑の處で御座るか。和尚曰く、

「寒時は闍梨を寒殺し、熱時は闍梨を熱殺す」

闍梨は他のところでも云つたとほり、僧への尊稱である。無寒暑のところとは外でも無い。貴僧、寒に遇はれたならば渾身寒になりきり、熱に遇はれたならば渾身熱になり切る。唯だ其れ丈けである。其處に、暑いとか、寒いとか、生くるとか、死ぬるとか、苦とか樂とかを絶した安樂の境界がある、洞山の此の答意は、二見對立を退けたもので、寒ならば寒、暑ならば暑と同生同死して、始めて、無寒暑の處に到り得たものといふのである。口先では生死即涅槃、煩惱即菩提などと、勝手に放言はしても、實際、其の境界に到るといふことは容易のことでは無いのである。

洞山の麻三斤

或る坊さんが、洞山和尚（雲門の法嗣、洞山初禪師なり、洞山良价禪師にあらず）に向つて問ふて曰く、

「如何なるか是れ佛」

佛とは如何なもので御座るかと云つて問ふた。和尚は、此時、丁度、胡麻を量つて居られたが、答へて曰く、

「麻三斤」

麻は胡麻のことである。胡麻三斤と答へられた。胡麻三斤とは面白い。答處まさに千斤の力量ありである。然りと雖も、凡情攀づ可からず。言葉に拘つて居れば分ることで無い。麻三斤は、茶碗五個でも、筆十本でも可い。眞意は麻三斤といふ言葉の外にある。到底、言說の及ぶところで無い。人々、冷暖自知せねばならぬ。

扨て、「如何なるか是れ佛」、これは、頗る肝要な問題である。我れ〳〵佛敎徒が汗水流して研鑽する所以のものは、悉く此の問題の解決が目的である。古人が此の問題に對して答へられた實例を、二つ三つ今擧げて見ると、

「殿裏底」

佛殿にある佛がそれだと答へたものもある。

或は曰く、

「三十二相」

三十二相八十種好の相貌を具備したものが佛だと答へた者もある。或ひは又た、

「眼横鼻直」

眼が横に鼻が直について居るものが佛であると答へた者もある。或は又た、

「乾屎橛」

乾屎橛とは「屎ふきべら」ぢや。屎ふきべらが佛であると答へた者もある。

是等は皆な、言句を離れた處に意味があるので、決して、言葉尻に捉はれて、飛んでも無い誤解をしてはならぬ。

芳草に隨ひ落花を逐うて

長沙(支那湖南省)の鹿苑寺に居た景岑和尚が、一日、遊山して、歸つて門口まで來ると、首座(門弟中第一位者)の一僧が、

「和尚、什麼の處にか去來せし」

和尚さま、何處へ御散歩になりました。斯う訊ねた、すると、和尚は、

「遊山し來る」

山遊びに行つて來たのぢや、と答へた。首座、亦た曰く、

「什麼の處にか到り來る」

遊山のことは分りましたが、何の邊へ御出でになられました。山の上か、下か、前か、後か、何方で御座いますか。かう言つて、和尚の脚下を試みたのである。すべて、禪僧の問答は、言葉の表面だけでは普通の會話のやうであるが、必ず、深い

底意を有つて居るものぢや。さア此の時の和尚の答へがナカ〳〵面白い。

「始めは芳草に隨つて去り、又た落花を逐うて回る」

最初は春の野花に誘はれて行き、又た、落花に引かれて歸つた丈けである。其處に何んの意があり、目的がある譯のもので無い。去來蹤跡なし。身心自ら輕快なりである。首座曰く、

「大いに春意に似たり」

大層、面白い陽氣な遊山で御座いましねとは表面の言葉、芳草といひ落花といふ、尚ほ春景の一方に偏す。沒蹤跡の往來とは云へまいとの底意である。和尚曰く、

「也た秋露の芙蕖に滴るに勝れり」

冷い露が、枯れた蓮の葉に滴るといふ秋景色――秋草の澄み渡つた悟境――殺風景な悟り臭い悟境――よりは春風駘蕩たる景色は眞實く、陽氣で好いわい。何處から何う推されてもスラ〳〵と答へて行くところ、禪機縱横、洒々落々たるものぢや。

未だ唇を沾さず

曹山和尚は、洞山和尚と共に曹洞宗の一派を開かれた大德で、洞山和尚の弟子である。此の曹山和尚の許へ、或る坊さんが來て曰ふには、

「清稅、孤貧なり。乞ふ、師、賑濟し給へ」

清稅は此の坊さんの名前である。私は孤獨で貧乏で誠に困つて居ります。何うか救濟て戴き度い。と斯う云つて出かけた。（此れは表面の意味で前にも述べた通り、禪宗の問答には必ず底意がある）其の實、此の僧、なか〳〵食へない。迷ひは愚か悟つた何物も御座らぬ、洒々落々の境界にある者だといふ意味が見える。これに對して曹山は、

「稅闍梨よ」

と呼びかけた。闍梨とは坊さんに對する尊稱である。稅、應諾す。

「ハイ」
と答へた。曹山曰く、
「青原白家の酒、三盞喫し了つて、猶ほ道ふ、未だ唇を沾さず」
青原は地名と見做した人もある。普通一般の百姓を白家といふと解釈して居る人もある。また白氏の家と見て置いて可いと云つた人もある。が、まア、其んなことは何うでも可い。我國で云へば、昔なら劍菱、今なら白鷹とか菊正宗、そのやうな美味い酒を十分に喫し了つて、一向に未だ飲みませぬと云つて口を拭つて知らぬ顔で居る奴ぢやといふ意味である。
清税といふ坊さん、私は孤貧で御座ると云つて、ズッと下手に出た。が、此の下手に出る奴はなか〳〵油斷がならぬ。ウッカリして居ると、曹山を土俵の外へ投げ出さうと構へて居る奴ぢや。然れ共、曹山、具眼、チャーンと先方の手を見拔いてしまつたから偉い。ところで、諸人、且く道へ、那裏か是れ税閣梨酒を喫すると

ころ。サア道へ、道つて見なされ。

黄檗の噇酒糟漢

黄檗希運禪師は百丈懷海禪師の法嗣で、臨濟宗の開祖、臨濟義玄禪師の師匠に當る人である。此の黄檗希運禪師が、一日、大衆に對し示誨して言はれるには。

「汝等諸人、盡く噇酒糟の漢なり。恁麼（かくの如く）に行脚（諸方を遍歷して修行する）せば、いづれの處にか今日（成道の今日、大悟の日）あらん。還た大唐國裏に禪師なきを知るや」

汝等は、何れも此れも皆な噇酒糟の漢である。噇酒糟とは酒の糟を食ふといふので眞實の酒を飲まずに、糟を食ひ歩いて居るといふのぢや。元來、悟りだとか迷ひだとかいふものはあつたものでないが、徒らに、悟りだの迷ひだのといふ言句に纏綿して居つて、眞の法味を知らぬ奴である。其んなことでは、何日まで行脚して廻つても、遂ひに大事了畢の期は無いぞ。汝等は此の大唐國中に禪道の師匠なんかといふものは一人も無いといふことを知らんのかや。汝等のやうに客觀的にばかり求めて廻つても駄目ぢや。一つ主觀的に求めて見よ。かういつて示衆された。すると、大衆の中から一人の坊さんが出て來て云ふには、

「只だ諸方に徒（徒弟）を匡し、衆（大衆）を領ずるが如きは又た作麼生（如何）」

左うは言はれますが、現に、諸方で、禪室を設け大衆を集めて、鉗鎚敎化して居られるのは、彼れや、全體、何うしたもので御座いますか。黄檗曰く、

「禪なしと道はず、只だ是れ師なし」

否や、禪がないとは云はぬ。禪は盡十方に充滿して居る。唯だ禪なるものは、答授せらる可きもので無いと云つたのみぢや。此の問端句頭には餌がある。人をして直下に本地の風光に接せしめんとする大慈悲心の存するところを見ねばならぬ。

潙山淨瓶を趯倒す

潙山禪師は、百丈懷海禪師の法嗣で、弟子の仰山と共に、潙仰宗の開祖と仰がゝ禪門有名の傑物である。

曾て、司馬頭陀が湖南から來て、百丈和尚に謂つて曰ふには、

「此頃、湖南に於て、一山を尋ね得た。それは大潙と名づける山であつて、一千五百人の善知識を居らしめるに足る」

と。百丈和尚は、これを聞くと、

「それでは衲が行かうか」

陀、曰く、

「和尚では不可ない」

丈、曰く、

「それは何故ぢや」

陀、曰く、

「あれは肉の山であつて、和尚は骨の人である。若し、和尚が彼の山に居たなら、問法の徒、千に滿ちまい」

丈、曰く、

「自分の會下に住し得る者は無からうか」

陀、曰く、

「一つ、自分が、會下の者を點檢しよう」

その時に、花林の覺が第一座であつたから、百丈和尚は、先づ、この覺を呼び來らしめた。丈、曰く、

「此人如何ん」

陀、請うて、聲欬一聲、行くこと數歩せしめて曰く、

「此人、不可なり」

百丈和尚は、次ぎに潙山を呼び來らしめた。潙山は、其時、典座であつたが、其の入り來るを見ると同時に、陀、曰く、

「これ潙山の主人なり」

此人こそ大潙山に行つて住職すべき人であると云つた。此夜、百丈和尚は、潙山を召して、

「わが化緣は此處にある。潙山の勝境、汝、當に之れに居すべし。わが宗を嗣續して廣く後學の度せよ」

と命じ、且つ、囑した。ところが、この事を花林の覺が聞いて、

「某甲、忝なくも上首に居る。典座、何ぞ住持するを得ん」

と抗議を申し出た。丈、曰く、

「若し、能く、衆に對して一轉語を下し得て、出格の者、當に與めに住持すべし」

と。そこで、淨瓶を拈じて地上に置き、問ひを設けて曰く、

「喚んで淨瓶となすを得ず、汝、喚んで何んとかなす」

林、曰く、

「喚んで木揆となす可からず」

淨瓶は、「梵語には運遲、此には瓶と謂ふ。常に水を貯へ、身に隨へ用ひて以て手を淨む」といふ註がある。木揆とは、木履のことぢや。

百丈和尚は、花林の答へが終つたから、更らに、潙山に向つて訊ねた。すると、潙山は、默つて、いきなり、足を擧げて淨瓶を趯倒したまゝ、さつさと大潙山を指して出かけてしまつた。丈、笑つて曰く、

「第一座、山子を輸却せり」

大潙といふ山を賭にして爭つたが、とう〳〵お前は輸却てしまつたとの意味である。その機鋒の鋭さが思ひやられるナ。淨瓶なんて、そんな物は自分の眼中にな

いぞと云つた見識である。

百丈の獨坐大雄峰

昔、一僧があつて、百丈懷海禪師に向つて、

「如何なるか是れ奇特の事」

といふ問ひを發した。絕學無爲の閑道人たる大悟底の人の上に、奇特とか不奇特とかいふことが御座いませうかといふ表面の意味であるが、句裏に機を藏して居る。敢て百丈和尙の虎鬚を撫でようとする意氣込みがある。すると、百丈和尙は、

「獨坐大雄峰」

といつて答へられた。此の百丈といふのは百丈和尙の住してをられる山の名であつて、その高さが百丈もあるといふので斯ういふ名がある。實は、大雄山といふ山の異名である。百丈和尙の答へは、奇特も何もない、衲は、此の大雄峰に獨坐して居るよといふのである。これは、百丈和尙は、大雄山の主人公であるから斯う云はれ

たので、釋迦如來ならば「獨坐靈鷲山」と云はれたであらう、阿彌陀如來ならば、「獨坐極樂世界」と云はれたであらう。兎に角、何に食はぬ顏つきをして、「獨坐大雄峰」の一言で此僧の力量を點檢された。此僧、唯だものでは無い。「獨坐大雄峰」の一言で、百丈和尙が、兩頭の機に墮してゐないのを認め、あゝ難有いといはぬばかりに直ちに禮拜した。すると、百丈和尙は、ピシリと此僧を打たれた。これは、百丈和尙の活機活用、天魔外道も窺ふに道なき態度を示されたものである。

此僧の「如何なるか是れ奇特の事」の問ひに對して、百丈和尙の答へが、若し、奇特玄妙の何物かに坐着してゐるやうな點があつたならば、此僧は直ちに和尙の法城に肉薄して、すつかり、和尙の鼻毛の數を讀んでしまつたであらう。

龍牙の西來意

龍牙和尙といふのは、湖南龍牙山妙濟院の居道禪師のことで、後に證空大師と謚號された大知識ぢや。翠微和尙といふのは、京兆終南山の無學禪師のことで、丹霞禪師の法嗣であつて、青原下四世の法孫である。或時、此の龍牙和尙が、翠微和尙に問うて云ふには、

「如何なるか是れ祖師西來の意」

祖師とは達磨大師のことぢや。達磨大師が、西の方の印度から東の方へ向つて遣つて御座つたのは、全體、何しに遣つて御座つたのですかといふ問ひぢや。此の質問には針が含まれて居る。ウツカリ乘ぜられて行くと直きと引つ懸かつて終ふ。謂ゆる龍牙の驗主問で、大いに翠微を點檢しようと云ふのだ。ところで、翠微もさる者、どつこい其手は桑名の燒蛤ぢや。

「我が與に禪板を過し來れ」

と命じた。スラリと切り拔けたのみか、却つて、對手の脚下を睨み付けて居る。禪板は禪板とも倚板とも云ふ。長く坐禪をした後に、身體を倚せかけて足を休めるもので、禪僧の脇息とでも云つたものぢや。「過し來れ」とは、「一寸取つて吳れ」といふほどの意ぢや。そこで龍牙は、言ふが儘に禪板を取つて與へた。すると翠微は受け取るや否や、其の禪板を以てピシャリと龍牙を打つた。龍牙曰く、

「打つことは即ち打つに任す、要するに且つ祖師西來意なし」

打つなら打つても可いが、要するに幾ら打つたとて祖師西來意は解らないと云ふのぢや。龍牙は翠微が自分の思ふ壺にはまつて來たので、此處ぞと自己の見識を吐露したのである。此の二人は共に、優劣を言ふ可きではない。作家と作家との出會であつて、到底、凡情で憶測の出來るものでは無い。さア、翠微に對しては、最早や意見を發表して終つたから、今度は、彼の有名な臨濟和尙を訪ねて、相變らず、

「如何なるか是れ祖師西來の意」

と問ひかけた。龍牙が何處へ行つても此の祖師西來意の一本槍でをるところ、なかなか面白いわい。全體、龍牙と西來意と、別であらうか、同じであらうか。人々、能く〳〵參究すべきところぢやぞ。臨濟曰く、

「我が與めに蒲團を過し來れ」

臨濟も當面の問ひに對しては知らぬ顏で聞き流し、衲にあの蒲團を取つて吳れと言つた。龍牙が素直に取つて與へると、此處でも又た、受け取るや否やポシャリと打られた。龍牙も好い加減にすれば可いに、それ見よ、翠微のところに於けると同じく此處でもまた、打たれたわい。併し乍ら、打つたのが打たれたのか、打たれたのが打つたのか、此れや解らんな、龍牙曰く、

「打つことは打つに任す、要するに祖師西來意なし」

打つことはお前さんの勝手だが、要するに祖師西來意はトント解り申さぬ。いやは

や、笑止千萬のことよ。此れは、龍牙が決して負け惜しみを云つたのでは無い。碧巖錄には、此まゝで終つて居るが、從容錄には、此のあとへ、

「牙、後に住院す、僧、和尙に問ふ。當年、蘂微と臨濟とに祖師意を問ふ、二尊宿、明すや未だしや。牙、曰く、明すことは明す、要するに祖師意なし」

とある。此の答ひは實に力がある。若し、此の公案から此句を取り去つたならば、此の公案は圓成しないと云つて可い。祖師西來意は、此れを明したも明さないもあつたものでは無い。蓋天蓋地、是れ西來意の端的ぢやないか。春に百花あり、夏に清風あり、それ其處の門前へ出たならば、電車も走れば豆腐屋も行く、大道坦々として明々白々ぢや。此の以外に西來意があるかい、禪意、佛意も、これ以外にないのぢや。

丹霞、佛像を燒く

丹霞の天然禪師が、曾て、洛東の惠林寺に行つた時、恰も、冬の最中で、寒氣凛烈たるものであつたから、早速、本堂から、佛樣の木像を擔ぎ出して火にくべ、不作法にも、股火をしてあたつて居つた。惠林寺の院主が、これを見て、大いに驚き、

「なぜ尊い佛像を燒くのか」

と咎めると、丹霞は平然たるもので、杖で灰を撥きながら、

「我れ燒いて舍利を得んと欲す」

と云ふ。院主が、

「木佛、何ぞ舍利あらん」

木像に舍利があつて堪るものかといふと、丹霞は、

「已に舍利なし、更に、此の兩尊を再取して之れを燒かん」

舍利が無ければ、序でに御脇立も燒いてしまはうと云つた。そんなことを云つたから、丹霞に罰が當るかと思へば、却つて、「院主、自ら、眉鬚墮落す」とある。却つて、院主が罰を蒙つた。

丹霞の手許には、佛像だから有難いの、枯木の枝だから詰まらないのと云ふ尊卑輕重の差別はない。これ丹霞が向上の玄底を叩いて、爲人の作略を示したのであるが、而かも、丹霞は、一面に、斯くの如き大見識を持つて居つたが、その修行は極めて綿密であつて、馬祖道一に參じて、其の印可を受け、石頭大師の行者房に居つて、三年間苦役したとある。丹霞の如きは、實に「意に毘盧の頂顆を踏んで、行ひは童子の足下を拜する」ものである。

心に非ず佛に非ず

或日、馬祖道一禪師が、上堂、說法して言はれるには、

「汝等諸人、各〳〵、自己これ佛なることを信せよ。是れ心、即ち、是れ佛心なり。達磨、南天竺より來つて中華に至り、上乘一心の法を傳へて、汝等をして、開悟せしむ」と。すると、一僧あり、出でゝ問ふ。

「和尙、甚麼としてか、即心即佛と說く」

禪師、曰く、

「小兒の啼きを止めんが爲めなり」

僧、曰く、

「啼き止んでのち如何ん」

禪師、曰く、

「心に非ず、佛に非ず」

と。かくの如く、我れが神であり、佛であり、宇宙であり、萬物である。我れは天地の顯現であると自覺するのが、青年にとつても、男にも、女にも、大切なことであつて、これが、人生向上の出發點である。

臨濟大師も、

「隨所に主となれば立所に皆な眞なり」

と說かれ、如何なる境遇に入つても、其の境遇を支配する主人公となりさへすれば到る處、可ならざるは無いと說かれてあるも、又た、孔子が中庸に於て、

「富貴に素しては富貴に行ひ、貧賤に素しては貧賤に行ひ、夷狄に素しては夷狄に行ひ、君子は入るとして自得せざるなし」

と敎へられたのも、我れを知り、我れを識得した上での話で、そこまで到るには、

即ち修行が必要である。

自分は豪いとか、自分の力を殊更らに振り蒔かいでも、修行工夫がチャンと出來上つて、佛心に得入し。眞我を究明してあれば、一言を發せず、末席に穩坐してあつても、威は滿場に揮ひ、氣は天地を動かすの力が自然に現なれて來るのぢや。

賊を化して家人と

明代の大聖、王陽明の語に、

「見聞覺知は外賊なり、情欲意識は內賊なり、只だ、能く、主人公、惺々不昧にして、獨り中堂に坐する時は、即ち、賊化して家人となる」

といふのがある。自分は禪僧であつて、禪僧の立場としては、王陽明の言はれる通り、何處までも自主的の心になつて、心中の賊を化して家人となすといふ煩悶解決法を說きたいのであるが、併し乍ら、こんな風の說き方では、直ぐ、誰れにも分るといふ譯には行かない。そこで、一般の人から煩悶解決について訊かれることがあると、

「人力で何うしても出來ないといふところに至つたならば、その上は神佛を信仰して一切をお任せなさい。さうすれば、よいやうになるものである」

と說き聞かせて居るが、此の神とか、佛とかいつて、それが決して自分の外に存在するものでは無い。各人が內に省みたならば、悉く、己れの心の上にある。

「直指人心見性成佛」

といふ達磨大師の御言葉は、此の間の消息を傳へたものである。

儒敎では「天」といひ、基督敎では「神」といひ、佛敎では「佛」といふ、これは、みな、同じものである。實に大きいもので、宇宙に瀰滿してをつて、今ま、直ぐ其の全體を見ようと欲しても、見られるものでは無い。併し乍ら、よく繪に描いてある雲間の龍のやうに、頭や爪がチラリ〳〵と見える如く、天といひ、神といひ、佛といふものゝ一小部分だけは、內觀自省さへすれば、チラリ〳〵と心中に認めることが出來るのである。

このチラリ〳〵認め得るものが、良心とか、良知とか、良能とか名づけられてをるものであつて、一度び此れを認め得たならば、暗夜に光明を發見した如き感じ

があらう。而かも、初めは、まことに微なる光であつて、有るか無きかの燈光を遙かに望んで進むやうに、この良心・良知・良能の光を辿つて進んで行けば、やがて、後には天・神・佛の全體を認め得られるやうになる。さうなれば、坦々として長安に通ずる大道に出られて、まことに、自由安樂の思ひがあるであらう。

だから、自分が人事を盡して及ばないところは、天に任せよ、神に任せよ、佛に任せよといふのは、各人が、各人の心中に潜むところの、良心、良知、良能に任せよといふ意味に外ならぬ。

瑞巖和尙の自警

大法は、何も、神や佛に向つて求めるには及ばぬ。我れ、即ち、神にも佛にも變らぬ精神を具して居る。だから、自ら自身に就いて尋ねたら宜しい。外に向つて此の法を尋ねんでも、內に向つてウンと承知すれば、それで可いのである。

瑞巖和尙と云へば、禪門に於ては、實に、有名な高德であるが、此の和尙は、平生、自身に向つて、

「主人公」

と呼びかけ、また、自ら、

「諾」

ハイと答へ、重ねて、

「惺々着」

ハッキリ醒めて居るかと訊ね、また、自ら、

「諾」

ハイ醒めて居りますと答へ、更らに、

「他時異日、人の瞞を受くる莫れ」

と警めておいて、また、

「諾々」

ハイ〳〵と答へて點頭されたといふことである。即ち、一人、磐石上に坐して、終日、愚の如く静坐工夫をせられながら、かくも自問自答してをられたのである。

そして「惺々」とは、もう徹底的にハッキリと醒めたやうに、能く萬象を照すが如くなる境界である。「着」は唯だ「惺々」の意味を強める爲めに使つたので、謂ゆる、自已も、主人公も、茲に至つては、共に惺々である。唯だ一つである。こゝに至らば、天地法界、惺々着である。而して、他を瞞し、自らを瞞ずる兩般もなけれ

ば、他の人の瞞を受くることも無いのである。

醒めて居るか何うか、主人公は居るか、といふやうに始終心そのものに氣をつけて修養をつゞけて行つたならば、何時なん時、主人公と呼んでも、「諾々」と云ひ得ることが出來る。

歸省禪師の家風

浮山の圓鑑和尚と、天衣山の義懷和尚と、此の二人が、まだ、修行中のことである。汝州葉縣廣敎院の歸省禪師の家風が頗る嚴冷枯淡であると聞き、その爐鞴に投ぜんと、寒中風雪を犯して訪ねて行つた。かくて、旦邁寮で坐禪をして居ると、そこへ禪師が歸つて來られ、大いに呵責すると共に、頭から水を注ぎかけられた。この豪い權幕に、他の雲水は膽を潰して歸つてしまつたが、此の二人だけは、ビショ濡れになつたまゝで、依然として坐禪をして居つた。

「汝等、去らずんば、我れ、汝等を打せん」

と云つて痛棒を與へられたが、それでも二人は動く色がなかつた。その不惜身命の修行振りを見屆けられて、

「汝等兩箇參禪を要す、今日より掛錫隨身せよ」

と云つて參學を許された。よほど志氣の堅固なものて無いと、大概は、この寒中行水に吃驚して逃げてしまつたさうな。かゝる事をされたのは、禪師が彼等修行者の脚下を點檢されたのである。

孔子の一貫と無字

子曰、參乎吾道一以貫之。曾子曰、唯。子出。門人問曰、何謂也。曾子曰、夫子ノ道ハ、忠恕而已矣。

（子曰く、參や、吾道、一以て之れを貫く。曾子曰く、唯。子、出づ。門人、問うて曰く、何んの謂ひぞや。曾子曰く、夫子の道は忠恕のみ）

これは、論語の、里仁篇に出て居る語である。或時、孔子が、「參や」といつて呼ばれた。云ふまでもなく、孔子の道統を得たる者は、曾參一人である。その曾參に對して、「參よ、我が道は一以て之れを貫く」、我が此の大道は、唯だ一もつて貫いてゐるぞよ。と云はれると、それに對して、曾子は「唯」と答へられた。唯とは、曲禮などに、「父召す時は諾すること無し、先生召せば諾すること無し、唯して起つ」と書いてある。諾といふ時は、明らかに「ハイ」と返事するのであるが、唯といふ

と「ハッ」と唯だ最も速かに引き受けた言葉である。ところが、此間の眞意が、ほかの弟子どもには、一向、分らなかつた。そこで、孔子が出られたあとで、門人が曾子に問ふた、「孔夫子の御言葉と貴方のお答へとは、何ういふ意味で御座いますか」と。曾子は、「忠恕のみ」と答へて居られるが、こゝは謂ゆる「人見て法說け」の手段でやられたので、此の問答往來の有樣を、禪門公案の中で、類例を擧げて見ると、多少、會得が出來よう。

一僧があつて、趙州和尙に向ひ、

「狗子、還た佛性ありや也た無しや」

訊ねると、和尙は、

「有」

と答へられた。すると僧は、

「既に、有なり。甚麼としてか、却つて、這箇の皮袋に撞入す」

と重ねて訊ねた。和尚は、

「他を知つて故らに犯すが爲めなり」

と答へられた。

又た、一僧が有つて、和尚に、同じく、

「狗子、還た佛性ありや也た無しや」

といつて訊ねると、今度は

「無」

といつて答へられた。そこで、其僧も、重ねて、

「一切衆生、皆、佛性あり。狗子、什麼としてか、却つて、無なる」

と訊ねると、和尚は、

「伊に業識性あるが爲めなり」

と答へられた。

これは、禪門で有名な六ケしい公案で、此の一無字の公案を、古來、幾多の英雄豪傑が、皆な血の涙を流して研究し、立派な人になつて居る。その一則である。問ふた坊さんは、始めから理窟を持つてゐる。佛は一切衆生悉く佛性ありと言はれたのに、なぜ、狗にだけは佛性が御座らぬかと、無といふ字を、虛無、または、滅無の意味に誤解した。こんな事では、とても禪宗の眞意は分らぬ。此の坊さんは、唯だ普通の學問的の理窟で解して、無といふのは、狗子に佛性が無いと受けたのであらう。その位の坊さんで有つたから、趙州は、再び、「彼れに業識性あるが爲めなり」と答へられた。業識とは、平たく云へば、迷ひの心である。これを敎相的に解釋するならば、餘程の言葉を費さなければならぬが、今は要がない。かう云ふことは、文字や、言語の表面からは、とてもその眞意は分らぬ。其の問答往來の樣子が能く似て居る。

「一以て貫く」

「唯」

と受けた。それは、孔子と曾子との間には通じて居る、門人等には。さつぱり、分らなかつた。そこで、問ふたら、曾子は、

「忠恕のみ」

と答へられた。これは曾子の力である。併し、忠恕といふことも大事ではあるが、「一貫」といふことに就ては、「忠恕」と世間で解して居るくらゐの意味では、未だ盡きない。先づ、文意は、まことに見易い言葉であるが、扨て、その孔子の眞意を推測してみると、なか〳〵深遠微妙である。

ソクラテスの臨終

昔、有名なソクラテースが、死ぬ時に、何も哲學者染みたやうなことを云はないで、唯、

「私が某から一疋の雞を借りてをるが、これだけ返して呉れ」

と云つて横臥して死んだ。これは、衲の理想に適つてをる。

わが禪の立場から云ふと、有難い顏をして、手を合せて偈でも唱へて死ぬのも宜しいが、寧ろ、何方を取るかと云へば、ソクラテースが、借りた雞を返しておいて、これでモウ世の中に借りがないから、息を引き取ると云つて、スーと逝つた方が男らしい。

佛さまや、神さまの往生としては何うか知らぬ。人間の往生としては、ソクラテースの方が衲の氣に入つてをる。これに、いろ〳〵理窟をつけずして、自分は、さ

ういふ方面に大變な同情を持つてをる。

五十一歳の初行脚

京都妙心寺の開山、關山國師は、大燈國師の法嗣で、後醍醐、花園の二帝が法の師と仰がせられだお方である。二十一歳の時、出家の志を達せんが爲めに、鎌倉へ出掛けられた。當時の鎌倉は、今の東京と同じで、中央政府の所在地であつたから、佛敎の如きも、其の精粹は矢張り鎌倉が代表して居つた。

關山國師は鎌倉で出家されたが、師匠は廣嚴和尙であつた。この廣嚴和尙の許で殆んど三十年間といふ長い間、何等得るところも無く修行して居られたが、偶ま建長寺の開山忌があつて、いろ〳〵高名の大和尙方が來集された。其時、國師は、同參の坊さん達と、四方山の話の序でに、

「今度、こゝへ集まられた大和尙方の中で、一體、誰れが一番、眞に大活眼を具した方であらう」

といふやうなことを語り合うて居られると、其中の一人が、

「お前は知らんのか、今、京都の紫野大徳寺に大燈國師といふ方が居られる。これこそ、當今、海内の第一人者であらう」

と告げた。それを聞かれた國師は、

「さうか、それは知らなかつた。然らば、これから行つて師事しよう」

と、法會の終るのも待たずに發足された。古人の道を求められたことは斯くの如くに熱心であつた。記錄によると、足袋を片足穿いた儘であつたといふが、求道の念の如何に旺んであつたかといふことが窺はれる。それも、血氣盛りの青年時代ならまだしも、齡、已に五十一歳に達して居られた。國師は、實に、五十一歳にして、一介黑衣の雲水として、初行脚されたのぢや。

かくて、東海道五十三次を徒歩で京に上られたが、記錄には、其の道中に富士を見ずと記してある。東海道を往復する旅人で、有名な富士を仰がぬ者は無い、まこ

とに嘘のやうな話であるが、これは國師の胸中に、一大事因緣が介在してをるが爲めに、只管、工夫三昧に入つて居られた爲めである。

關の一字に二ケ年

そんな具合であつたから、日ならずして京都に到着された。直ぐに大燈國師を訪うて、

「新到相見」

新到は新入門者の義である。新入門者がお目にかゝりますと、馬車馬的に大燈國師の居間へズイと入られた。

大燈國師は、此奴、利かん氣のどえらい奴が來たなと、其方に向き直らうとされるやされぬに間髪を容れず、

「如何なるか是れ宗門向上の事」

と訊ねられた。禪宗のギリ〳〵生粹のところが承はりたいと云ふのである。禪家では、二階から目藥といつたやうな迂遠なことは一切やらぬ、直きに大將の本陣に

切り込み、一騎打ちの眞劍勝負ぢや。すると、大燈國師は、

「關」

と答へられた。關山國師は此れを聞かれると、「拂袖して便ち出づ」とあつて、袖振り拂つてプイと出て行つてしまはれた。大燈國師曰く、

「作家の禪客、天然の在る有り」

天然に作家の禪客たる仕格を具へた、話せる奴ぢやわいと喜ばれた。

東海道五十三次を、途中、富士も見ないで上洛されたのであるが、相見の際の問答は、唯だ是れ切りであつた。關山國師が、

「關」

の一字を聞かれるや、直きに、袖振り拂つて出て行かれた這般の消息は、禪門でも久參底でないと會得は出來ない。

扨て、この問答が濟んでから、關山國師は、大燈國師に向つて、

「どうか御側で御指導を願ひ度う存じます」

と云はれたが、その當時は戰亂の打ち續いた時代であつたから、佛門に隱れて事を計らうとする不逞の徒が少くなかつたので、無暗に、法師は都に止まることが出來なかつた。それで、大燈國師は、

「誰れかお前の保證人になつて呉れる者はないか」

と訊かれると、關山國師は、呵々と笑はれて、

「夫れ、善知識は三世貫通の正眼を具すと聞く、一見された丈けで、佛を擔いで來たが、魔を擔いで來たかは、面魂で分る筈です。遙る〳〵鎌倉から上つて來ました拙僧に、保證人を立てることが出來るものですか」

よ云はれた。實に、かういふ氣鋒の鋭い方であつた。大燈國師も其の器量を認めてお側に置かれることになつた。さうして、最前の「關」の字を公案に與へられた。

關山國師は、この「關」の字に就いて骨を折られること二ケ年間、一夜、忽然と

して大悟された。直ちに走つて見解を呈されると、大燈國師は、手を拍つて喜ばれ直ちに關山と賜はつて印可證明されたのである。其時「關」の一字に附せられた偈が、

鎖斷路頭難透處、　寒雲長帶翠巒峰、
韶陽一字藏機去、　正眼看來隔萬重、

といふのである。

頭と頭をゴツリ

關山國師が、美濃國、井深の山中で聖胎長養して居られた時のことである。土地の百姓どもは、名もない一雲水だとばかり思つて居つたが、大燈國師が臨終の際の推薦によつて、勅命で召されることになつた。それを聞いた土地の者共は、はじめて、

「そんなに傑い坊さまで有つたのか」

と呆れたといふことである。時々、茄子や芋などを國師に持參してをつた或る老人夫婦が、隨喜の涙を流しながら、明日は愈よ出立といふ夜に、國師に向ひ慇懃に說法を願つた。

すると、國師は何も言はずに、老人夫婦の頭と頭を鉢合せにゴツリとやられた。兩人が、

「痛ーい」

と言ふと、國師は、

「それ、その痛いのが、此上もない難有いことぞ」

と言はれた。此のゴツリで老人夫婦は悟つたといふことである。

牛の睾丸〳〵

關山國師が、勅命によつて、京都妙心寺の開山になられてからである。或る檀家の者が、國師に相見して、

「和尚さま、男の子が生まれましたから一句祝うて下さいませ」

といふと、國師は、

「牛の睾丸〳〵」

と云はれたさうな。ブラリ〳〵と落ちさうで落ちん、大丈夫なものは牛の睾丸である。成長したのち、こんな風に世渡りせよといふ教訓であるが、なか〳〵禪味のある語である。

慧玄が這裏に生死なし

一僧があつて、關山國師に向つて、

「生死事大無常迅速、請ふ道へ」

此の世は無常迅速であつて、生死のことは一大事である。どうか教へを垂れて下さいと云ふと、國師は、

「慧玄が這裏に生死なし」

と云つて、打つて〳〵打ちのめし、とう〳〵逐ひ出してしまはれた。此の僧も、こゝで氣が注いたであらうよ。慧玄といふのは國師のお名前ぢや。

俳人芭蕉の參禪

俳人として有名な、彼の松尾芭蕉は、佛頂和尚に參禪して、大悟徹底した人である。この佛頂和尚といふのは、俗に佛頂面といふことを云ふが、平生、ムッと怒つたやうな顏附をして居られたもので、決して、白い齒を見せなかつた和尚である。

當時水戸の鹿島の根本寺に住職してをられた。

或日、和尚は、六祖五兵衛を伴つて、深川に芭蕉翁を訪れられた。六祖五兵衛が先きに立つて、門を入るや否や、

「如何なるか是れ閑庭草木裏の佛法」

と問答しかけた。すると翁は、

「葉々、大抵は大、小抵は小」

と答へられた。今度は、佛頂和尚が、

「今日のこと作麼生」

と問はれると、翁は、

「雨過ぎて青苔濕ふ」

と答へられた。和尚また、

「青苔未だ生ぜず、春雨未だ來らざる時、如何ん」

と問はれると、丁度、其時、一匹の蛙がドブンと庭の古池へ飛んだので、翁は、早速、

「蛙飛び込む水の音」

と答へられた。そこで、和尚は、「我が道の極意を得たり」といつて印可證明を與へられたのである。

其時、坐にゐた、其角、杉風、嵐雪等、その他の澤山の門人どもが、翁に向つて

「蛙飛び込む水の音で、御許しを得られましたが、頭の五文字をお附けになつたら

如何ですか」

といふと、翁は、

「さらばお前たちから附けてみよ」

と云はれたので、杉風が、先づ、

「宵暗や蛙飛び込む水の音」

とやつた。次ぎに嵐雪が、

「淋しさや蛙飛び込む水の音」

と附けた。最後に其角が、

「山吹や蛙飛び込む水の音」

とした。各その力量が見えて居る。翁は大いに喜ばれて、皆な結構である、が、私は、やはり、其儘に、

「古池や蛙飛び込む水の音」

とすると云はれた。これが今に有名な古池の句である。

何事も、こんな見合に自由が得られてくると、すべての事に取り外しがない。常に、樂しんで業務に從事し得られるのである。それには不斷の精進努力を要するのである。

鐵舟居士と圓朝

三遊亭圓朝といへば、誰れでも知つてをる通り、明治年間の講釋師の名人であつて、役者の市川團十郎と共に、日本一と併稱されたものである。講釋師と云へば一藝人に過ぎないが、併し藝人とは云つても、今日の何々株式會社とか、何々銀行頭取とか云はれる人たちが、到底、及びもつかぬ人格の高い立派な君子であつた。山岡鐵舟居士の提撕を受けて、養ふところ尋常でなかつたが故である。

初め、圓朝が、山岡鐵舟居士を訪問した時に、居士は、突然、圓朝に向つて、

「お前は講釋師として名人の聞えが高いが、今ま此處で一席話してくれまいか」

と所望されたので、圓朝は、

「何を御講釋いたしませう」

と訊くと、居士は、

「桃太郎の話がよい」

と言はれる。圓朝は怪訝な顏をして、

「桃太郎の話と申しますと、あの、小供に能く聞かす鬼退治の話で御座いますか」

と訊き返すと、居士は、

「左樣〳〵、あれ〳〵、あれは本當に面白い話であつた」

と云はれるので、圓朝も呆氣にとられて默つて居ると。居士は、

「私が小さい時に、母に添寢をして貰つて、よくあの話を聞かされたが、本當に面白くて、何時とはなしに、睡氣を催したものだ、その面白味は今に忘れない。話下手の母がしてさへ其の通りであるから、名人の聞こえ高いお前の話なら、さぞかし面白いことであらう。さア・早く話してくれ」

と催促する。圓朝は困つてしまつた。やはり、默つてをると、居士は、

「お前は桃太郎の話さへ出來んのか、それぢや名人も何もあつたものでない。大の

話下手だ。歸つたら舌を切り口を結んで語ることを工失してみよ」
と云はれた。それから、圓朝は、奮勵して、切りに苦心工夫を凝らしてをつた。すると同じく鐵舟居士について學んでをる同僚が、度び〳〵訪ねて來て、
「何うだ出來たか〳〵」
と訊くので、いよ〳〵窮し、寄席の畫席、夜席に往復する車の上でも、絶えず工夫して、寢食を忘れると云ふ有樣であつた。此くの如く沈思默考すること三年に及んで、辛つと一條の活路を發見した。そこで、居士を訪ねて、
「先生、今日は一つ桃太郎の御話をいたしませう」
と云ふと、居士は、
「今日は聞きたく無い」
と云はれた。
其後、法會があつて、嵯峨の天龍寺の滴水和尚も來られ、圓朝も、居士に招かれ

て二三の同僚と共に席に列つた。其時、居士は、一同に向つて、
「大の話下手の圓朝が、今日は、舌を切り、口を結んで、一席、語るさうで御座いますから、御聞き下さい」
と披露された。やがて、圓朝は、講釋の席に案内されたが、座に上つて、待てども〳〵一人の聽衆も來ない。すると、圓朝は、この聽き手のない空室で、獨り扇を叩いて語り出したのは、苦心慘憺の末、自分で作り出した「新桃太郎」と題する講談であつた。これは、至つて臆病な桃太郎が、鬼ケ島を恐がつて、よう敵打ちに行かないといふ筋に作つたもので、圓朝は獨り興に乘じて滔々と一席辯じてしまふと、今まで関として聲なかつた空室の四隅から、割れるやうな喝采の拍手が起ると共に隔ての襖が一時に徹せられると、そこには聽衆が充滿して居つた。
「まことに上出來であつた」
と賞められ、語を次いで、

「併し、私では能く分らんから、幸ひ滴水和尚も見えて居るから、和尚に批評を願ふがよい」

と云はれると、和尚も、亦た、

「まことに結構であつた」

と許されたといふことぢや。講釋は一つの技藝に過ぎない。それでも、一世の名人となるには、これほどの苦心が要る。鐵舟居士が嚴しい手段をとゐて、絶對絶命の域に至らしめたのは、獅子が其子を千仞の谷底に突き落して、奮迅の勇を養はしめるやうなもので、これを「獅子迷子の訣」と云つて、古來、禪門の師家は、皆な此の手段を用ひて居る。學人も、亦た、此の絶對絶命のところまで奮迅しなければ、遂ひに悟入の期はないのである。

一休と蜷川親當

蜷川親當は、其の家、世々、朝廷に仕へまつつた北面の武士であつた。通稱を新右衛門といひ、知蘊居士と號す、夫妻共に禪道に達して居た。一日、山城國薪村の酬恩庵で、一休和尚に相見した。和尚彼れに問ふて曰く、

「汝サン何處から來た」

知蘊曰く、

「和尚の國から」

和尚曰く、

「國の樣子は」

知蘊曰く、

「鴉はカア〳〵雀はチウ〳〵」

和尚曰く、

「此の外に、變つたことは無いか」

知蘊曰く、

「吉野の櫻花が今眞盛りです」

和尚曰く、

「まア其處へ坐つて茶でも喫れ」

これより互に往來して交りが深かつたと云ふ。

一休、或時、知蘊に向つて、

何をがなまゐらせたくは思へども
達磨宗には一物もなし

知蘊も、また、返して、早速、

何物も無きを賜る心こそ
本來空の妙味なりけれ

一休和尚全集に、二人の道歌問答が載つて居るが、今此處に、其の二三を掲げると、

知　蘊

悟りなば坊主になるな魚くへ
地獄に行つて鬼にまけるな

一　休

鬼といふ恐しものは何處に居る
邪見の人の胸に住むなり

一　休

きのふ過去けふの現世にあす未來
起きての神に寢てのみ佛

知蘊

一代の守本尊たづぬるに
われ人ともに飯と汁なり

知蘊の妻にも左の詠がある。

あさいとの長し短し六ケ敷や
うむの二つをいつか離れん

—終—

以心傳心
教外別傳 達磨の足跡
定價金一圓八十錢

述者 釋宗演禪師
發行者 東京市本郷區湯島三組町八十番地 石田彦三郎
東京市小石川區戸崎町九十四番地
印刷者 月輪治
東京市小石川區戸崎町九十四番地
印刷所 昭和堂印刷所
東京市本郷區湯島三組町八十番地
發兌 中央出版社
電話下谷四五九番
振替東京一五七八〇番

昭和六年十月十日印刷
昭和六年十月十五日發行

不許複製

□□□佛教・精神修養書類目錄□□□

□佛教より觀たる人の一生　十版　南條文雄著　定價金二圓五十錢　送料金十八錢

□親鸞の觀たる人の一生　五版　下村諦信著　定價金二圓五十錢　送料金十八錢

□觀音信仰と人の一生　四版　小瀧淳著　定價金二圓五十錢　送料金十八錢

□高僧の觀たる人の一生　四版　平松貞夫著　定價金二圓五十錢　送料金十八錢

□修養の極致　處世の秘訣　洗心錄　八版　新井石禪著　定價金二圓五十錢　送料金十八錢

□心頭滅却すれば火も亦涼し　六版　新井石禪著　定價金二圓五十錢　送料金十六錢

□禪話の泉　三版　新井石禪著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□法華經要義　五版　本多日生著　定價金三圓　送料金十八錢

□日蓮主義精要　五版　本多日生著　定價金三圓五十錢　送料金十八錢

□日蓮主義の心髓　五版　本多日生著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□信仰・修養・思想より論じたる日蓮主義の本領　四版　本多日生著　定價金二圓五十錢　送料金十八錢

□戲曲　日蓮上人　三版　山本勇夫著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□戲曲　親鸞上人　三版　山本勇夫著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□求めよ與へられん　四版　釋宗演著　定價金二圓五十錢　送料金十八錢

□生死解脫心眼開發　禪の眞髓　四版　釋宗演著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□三百六十五日佛教講話　今日のお話　四版　下村諦信著　定價金二圓五十錢　送料金十八錢

□觀音信仰の體驗　四版　小瀧淳著　定價金二圓八十錢　送料金十八錢

□禪により心身を練磨せる英雄　四版　谷至道著　定價金二圓五十錢　送料金十八錢

□心身の修養膽力の養成　參禪道話　五版　大內青巒著　定價金二圓五十錢　送料金十八錢

□人生の旅　六版　大內青巒著　定價金二圓五十錢　送料金十八錢

□人生の指針處世の要諦　世渡りの道　五版　大內青巒著　定價金二圓五十錢　送料金十八錢

□菩提心を求むる道　四版　南條文雄著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□平易に說いた眞宗の教義　四版　南條文雄著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□平易に說いた教行信證　三版　加藤信寂著　定價金三圓　送料金十八錢

□平易に說いた歎異鈔　三版　下村諦信著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□平易に說いた碧巖錄　三版　田中价山著　定價金二圓五十錢　送料金十八錢

□平易に說いた無門關　三版　山下行誠著　定價金二圓　送料金十六錢

□平易に說いた釋迦一代記　十二版　江部鴨村著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□人の道と佛の道　四版　道重信教著　定價金二圓　送料金十八錢

□佛教より見たる死生觀　四版　道重信教著　定價金二圓　送料金十八錢

□人一代の修養　四版　道重信教著　定價金二圓　送料金十八錢

□人生を歩み行く道　五版　道重信教著　定價金二圓　送料金十八錢

□心の病ひ　應病與藥　四版　道重信教著　定價金二圓　送料金十八錢

□參禪入門　四版　菅原時保著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□心を練り人を作る　禪の極致　七版　中原鄧州著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□悟りの眼を開け　四版　日置默仙著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□禪學講話　南天棒禪話集　三版　中原鄧州著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□精神修養　日蓮聖人法話集　四版　高橋北堂著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□精神修養　親鸞聖人法話集　三版　遠藤達郎著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□趣味と研究とから解剖した　佛様の正體　四版　土谷春堂著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□傳說に殘れる　高僧の生んだ奇蹟集　三版　高島玉泉著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□讀んで面白く修養になる　高僧逸話集　六版　土谷春堂著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□讀んで面白く修養になる　禪僧問答集　五版　土谷春堂著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□笑ひながら修養になる　一休珍話集　十二版　土谷春堂著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□笑ひながら修養になる　白隱珍話集　五版　土谷春堂著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□笑ひながら修養になる　澤庵珍話集　五版　茶狂堂主人著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□平易に說いた　佛教迷悟問答集　三版　高島玉泉著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□佛教因果物語　六版　土春春堂著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□人生を笑つて解いた　一休和尙　五版　赤木健著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□心の塵を笑て拂ふ　一休諸國巡禮記　四版　青木繁峰著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□笑ひながら修養になる　一休頓智笑話集　四版　遠藤良雲著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□笑ひながら修養になる　一休珍問答集　四版　遠藤良雲著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□人年の惱みを救ふ　親鸞上人　四版　杉森翠谷著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□禪の極致を洒脫に解いた　澤庵和尙　三版　谷至道著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□修養の極政　處世の要諦　心の洗濯　三版　修養會著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□佛敎一般の人に講話聞かせたい　一日一講　三版　田並靑嵐著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□加持祈禱　眞言秘密の解剖と其奧傳　三版　日下敞道著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□處世應用　禪の殺活　三版　竹田默雷著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□禪の解剖（肉と血と皮）　三版　釋宗演著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□佛敎初步　佛道に入る門　三版　田並靑嵐著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□お釋迦樣がやさしく說いた　佛敎入門　三版　二入素堂著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

□諸敎對比本尊優劣　阿彌陀佛の解剖　三版　小野淸秀著　定價金一圓八十錢　送料金十六錢

609
318

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black